

やはり俺が『怪異症候  
群』に巻き込まれるの  
はまちがっている

クロスディア

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ボツチな少年、比企谷八幡。彼はとある怪異の影響で、少しだけ人間を辞めていた。そんな彼が『怪異症候群』に巻き込まれる時、運命は動き出す。

# 目次

第1部 第1章	ひとりかくれんぼ	
第0話	プロローグ	1
第1話	ひとりかくれんぼ	5
第2話	響き渡る謎の声	9
第3話	襖の達人、ラリックマ	13
第4話	遊び盛りのラリックマ	18
第5話	撲殺天使美琴ちゃんの片鱗	22
第6話	『ひとりかくれんぼ』という遊戯の終了	そして、次の怪異は：
幕間①		25
幕間	その1 八幡とラリックマ	29
その2人物・怪異紹介		33
第1部 第2章	くねくね	
第7話	特務課 警部補の氷室等	37
第8話	青春は悪であり、嘘である	41
第9話	油揚げ	45
第10話	初期から割と素直な雪ノ下は最強だと思う	49

第11話	迷子の迷子の美琴ちゃん	88	第20話	『くねくね』という狂気の消
53			失	そして、次の怪異は：――
第12話	面倒事は向こうから		幕間②	93
57			幕間	その3 千葉の国宝 サイゼリ
第13話	田舎は魔境――	61	ヤ	
第14話	怪異と再従兄弟と地獄絵図		その4	人物・怪異紹介(第2章版)
		66	101	
第15話	くねくね――	70	第1部	第3章 猿夢
第16話	同族と同属――	74	第21話	連続する怪異の謎――
第17話	ナチュラルな下の名前呼び		第22話	姫野 美琴の謎／出発進行
		79	♪	
第18話	NNN臨時放送――	84		110
第19話	『くねくね』の怒り		第23話	悪夢は続くよ、どこまでも



第35話	由比ヶ浜 結衣	181	第42話	旧・神代家	216
第36話	地獄への道は『善意』で舗装		第43話	神代 春子	220
されている		185	第44話	能面	224
第37話	第一次ポイズン・クツキン		第45話	動き出す局面	228
グ		190	第46話	お手柄、鳳凰丸	232
第38話	今度こそ、真剣に	195	第47話	明かされる秘密	236
第39話	やはり、由比ヶ浜は料理が				
できない		200			
幕間④					
幕間	その7 お礼と願い	204			
第1部	最終章 怪異症候群				
第40話	神代家の謎	208			
第41話	怪異症候群	212			

# 第1部 第1章 ひとりかくれんぼ

## 第0話 プロローグ

### 第0話

神代由佳 side

千葉のとある町にある豪邸。

そんな豪邸の一室で…

「…『ひとりかくれんぼ』の遊び方。」

一人の少女が、とある遊びの仕方を調べていた。

「事前準備その一。ぬいぐるみの綿を全て抜き、代わりにお米を中に詰める。」

人形を使つた遊びなのだろうか？

「その二。自分の爪、もしくは血をぬいぐるみの中に入れ、詰め穴を赤い糸で縫う。」

…少し物騒になつてくる。

「その三。風呂場に水を張り…隠れる場所に塩水を確保しておく。」

隠れる場所が必要な時点で、その遊びは…

「…うん、事前準備はよし。後は実行手順の確認ね。」

そう言いながら、部屋を出ていく。

この時の彼女は夢にも思わなかっただろう。

この行為が後に…

…あの悲劇を引き起こす事に。

—————

比企谷八幡 side

草木も眠る丑三つ時、それすらも越える真夜中の時間。

そんな夜の千葉を、一人の少年が歩いていた。

その少年は目がDHAが豊富そうな程に腐っており、似合わない程の可愛らしいアホ

毛がついている。

まるで、というかまんま不審者である。

そんな彼は…

「全く、何処の馬鹿だよ。こんな時間に奴等呼び足したのは…」

と、不機嫌そうに彼は呟く。

「…しかも、俺の近くときた。少し待てばアイツ等が動くんだろうが…」

しかし、彼は自分に言い聞かせる様に呟き続ける。

「それより前に何かあったら、唯でさえ悪い目覚めが、より悪くなるからな…」

と、腐った目をより腐らせながら、彼はとある場所へと一直線に向かっていた。その場所には、目を見張る様な豪邸が建っていた。

「さて、こんな時間に俺を起こしてくれたんだ。収穫が無きや、許さないからな。」  
『絶対に許さないノートに書いてやる。』と呟きながら、彼は慣れた手つきで鍵を開けていく。

これは不審者どころか、泥棒にまで昇格しそうだ。

「さて、今回の怪異はどんな奴かね…」

そんな事を呟いていると、後ろからドアが開く音がする。

急いで振り向くと、其処には…

「きゃつーど、泥棒…」

「いや、お前も端から見れば大差ないだろ…」

自分が通っている高校、総武高校の制服を着た女の子が居た。

しかも、いきなり泥棒扱いだ。全く、状況が状況だから仕方がないとはいえ、酷いだ。  
だ。

しかし、そんな彼等の空気を読まず…

??? 『ぎゃああ!!!』

と、誰かの叫び声が響き渡る。

「えっ、な、何あの声…」

「…そうか。少し遅かったか…」

と、彼女は戸惑い、彼は少し後悔する様に呟く。

二人はまだ知らなかった。

これから一年間も自分達を苦しめ続ける…

…呪い、『怪異症候群』の始まりだという事を。

続く

# 第1話 ひとりかくれんぼ

## 第1話

姫野美琴 side

私には神代由佳という、古くからの親友が居た。

由佳から連絡があつたのは：午前3：00過ぎのことだつた。

こんな時間に電話してくるなんてあり得ない：

しかも、由佳からの留守電には、何も入っていなかつた。

きつと、何か：何か起きたのだ。

そう思わずにはいられなかつた。

そして、こうも思つた。

何か：不吉なことが起きているのだ、と。

—————

どしや降りの中、急いで私は由佳の家へ向かつた。

急いでいたせいで学校の制服を着て来てしまつたが、今はそんな事を気にしている必

要はない。

「はあはあ、着いた…」

息を切らしながら、由佳の家のドアへ貫っていた合鍵を差し込む。

彼女とは長い付き合いだからか、彼女の親から何故か貰ったけど役に立ちそうになった鍵が遂に役に立つ。

そう思っていたのだが…

「あれ？開いてる…」

何故か、鍵は開いていた。

無用心すぎるし、おじさん達がこんなボカをやらかす訳がない。

私はおそろおそろのドアを開けてみると…

「きゃっー！ど、泥棒…」

そこには、DHAが豊富そうな特徴的な目と、妙に似合う可愛いアホ毛がある男の人が居た。

しかも、何処かで見た事がある様な…

「いや、お前も端から見れば大差ないだろ…」

ぐうの音も出なかった。

確かにその通りだ。そもそも、こんな時間に来る事自体が失礼…って！

一瞬だけ流されそうになった私が反論しようとした瞬間…

『ぎゃあああ!!』

それを遮る様に、何処かで聞いた事のある様な女の人の叫び声が轟く…

「えっ、な、何あの声…」

「…そうか。少し遅かったか…」

と、私の前に居る男の人が何か呟く。

もしかして、この人…何か知ってる？

「あ、あの…」

「ん？そうか、お前が居たな。何をしに来たかは知らないが早く帰った方がいい。じゃないと手遅れにな…もう遅いみたいだな。はあ…」

と、彼は好き勝手な事を言い、呆れた様に溜め息をつく。

溜め息をつきたいのはコツチだよお…

「…仕方がないか。おい、お前…」

「は、はい！な、何でしょうか？」

「お前、一体何しに来た？」

と、いきなり彼が問いかけてくる。

それは私の台詞だよお…

「わ、私の親友からこんな時間に電話が掛かってきて、それで心配になって…」

「そうか、親友想いなんだな。俺には親友どころか友達すら居ないからよく解らんが……」  
ごめんなさい、どう答えていいか解らないです。

——  
こうして、私は彼と出会った。

一年間、共にあの呪い……

……『怪異症候群』へと立ち向かう事となる男。

比企谷八幡、と。

続く

## 第2話 響き渡る謎の声

### 第2話

「……………」

「……………」

沈黙が痛い。

滑ったか？別にギャグを言ったつもりは無いんだが…

だが、このまま黙っている訳にもいかないか。

「…はあ。おい、お前。」

「は、はい…」

「信じられないかもしれない。疑わしい話かもしれない。だが、今から現実を見せる。」

と、俺はドアノブに手をかけて開こうとしてみせる。

だが、ドアはピクリともしない。

まるで、謎の力が働いているかの様に…

「えっ、開かない?」

「お前もやってみろ。」

と、彼女に促す。

彼女はおそるおそる俺と同じ様にドアを開けようとするが、やはりピクリともしない。

「な、何で…」

「俺達は閉じ込められた訳だ。簡単に言えば、『元凶を倒すまで出れない部屋』だな。」

全く、色気じゃなくて血気に溢れた部屋なんて嫌すぎるわ。

「そ、そんな…。じゃあ、早く由佳を、由佳を探さなきゃ!」

「おいおい、少し落ち着け。」

「そんな事を言われても無理です!こんな変な事が起きてるんですよ!由佳も酷い事に

…」

はあ、仕方がないか。

直ぐに元凶の所へ行くつもりだったんだが…

下手にコイツにうちよろされたら敵わない。

「部屋…」

「…はい?」

「その由佳っていう奴の部屋へ案内しろ。お前一人で勝手に動かれちゃ、面倒だからな。」

そして、二人で由佳とやらの部屋へ向かう事になる。

しかし、この家は部屋が多いな。

掃除とか大変そうで嫌だな。元専業主夫希望者としては、あまり媚として入りたくないな。

まあ、そもそも俺を相手にしてくれる様な危篤な女なんて皆無だが…

「…此処です。」

「そうか。…何だ、その目は？」

何かジト目という奴で見られてる気がする。

俺、何かしたか？

「変な事はしませんよね？」

「はあ？する訳ないだろ、興味ないし…」

「えっ、そっちの…」

「違う！俺はノーマルだ！」

何故、そっちへ持っていく。

唯でさえ、二年になってから何故か腐海の主にそういう妄想対象として目をつけられてるんだ。

こんな所で、腐海なんかに落ちたくない。

「もういい。開けるぞ……」

「あつ、ちよ……」

彼女に構わず、ドアを開ける。

すると、そこには……

「そ、そんな……ゆ、由佳！」

彼女が由佳と呼ぶ少女が倒れていた。

しかし、彼女に悲しむ隙を与えないかの様に……

『まーだだよ♪』

かくれんぼをする時に、隠れる側の返事。

子供の様でいて、それでいて異質さを感じさせる……

妙に頭に残る嫌な声が、家中へと響き渡るのであった。

続く

## 第3話 襖の達人、ラリツクマ

## 第3話

美琴「由佳、由佳……」

八幡「……………」

謎の声に怯えながらも、涙を貯めて目の前に倒れ伏す少女の名を呼び続ける彼女……その姿が、どうしようもない程に……

『小町！八重！！頼む、死なないでくれ!!!』

重ねてしまう、あの忌まわしい悪夢の過去。

俺が救えなかった、彼女達の姿と……

だが……

八幡「……少しどけ。」

美琴「……………えっ?」

無理やり彼女を退かし、倒れ伏す少女へ近づく。

……聞こえる。ほんの微かだが、呼吸の音がする。

普通一般人の人なら解らないかもしれないが、確かにこの少女は生きている。

八幡「落ち着いて、胸に耳を当ててみる。コイツ、まだ息があるぞ。」  
美琴「えっ、本当ですか!？」

八幡「こんな事で嘘を吐く理由が何処にある?」

と、少し離れ、彼女に少女の鼓動を聞かせてやる。

耳を当てた彼女の涙は、悲しみの涙から喜びの涙へと変わり：

美琴「い、生きてる。良かった、本当に良かったよお…」

だが、安心して暇などない。

…まだ、この少女をこうした元凶は潰せていないのだから。

八幡「…さて、そろそろ行くぞ。」

と、倒れ伏している少女を背負う。

だが、彼女は怪訝そうな目で：

美琴「えっ、何して…」

八幡「このまま此処に寝かせておく訳にはいかないだろ。緊急事態なんだ、背負う位でセクハラだの何だの喚くなよ。」

中学の時、困っている子を手伝おうとしただけで嫌な目で見てくる奴も居たからな。

その後、何故か悪い噂まで流れたし：

美琴「えっと…その…：はい。」

八幡「…ならいい。早く行くぞ。」

美琴「ど、何処にですか？」

八幡「…この事態の犯人、元凶の所だよ。」

—————

俺は少女を背負いながら、彼女と共に真っ直ぐ元凶の所へと向かう。

美琴「場所、解るんですか？」

八幡「…色々あつてな。解るんだよ、感覚的にな。」

その精度はGPS並だ。

解りすぎて、嫌になるレベル。

その分、確実に捉えられるから困った物だ。

八幡「この臭いは…」

美琴「えっ、何が臭ってますか？私は何も臭いませんですけど…」

八幡「少し覚悟をしておけ、この先には悲惨な物が待ってるぞ。」

そう彼女に告げ、目の前の部屋を開けさせる。

その先には…

美琴「そ、そんな…」

八幡「やはり、か…」

胸を何かに刺され、血塗れになった男が転がっていた。

死の臭いもキツイ。俺達がこの家に来る前に、殺されていたのだろう。

美琴「お、おじさん…」

八幡「成る程、この子の父親か。それよりも、俺より前に出るな。」

あの男の死体の元へ駆け寄ろうとする彼女を、制止する。

美琴「な、何で！」

八幡「此処から先は、奴の領域世界だからだよ。」

そう告げた時、この部屋の襖の内側から…

バン！バンバン！バンバンバン！と、リズムカルな殴打音が響き渡る。

まるで、太鼓の達人だ。

美琴「きゃっ！いいいきなり何が…」

八幡「どうやら、おいでなすった様だ。今回の元凶が。」

その瞬間、襖は吹き飛ばされ中から熊の人形らしき物体が飛び出してくる。

奴は俺達を認識すると、嬉しそうな声で…

???『私…鬼ごっこがしたい♪』

と、告げたのだった。

続く

## 第4話 遊び盛りのラリックマ

### 第4話

手には血がこびりついた包丁。見た目はリラックマの様な熊の人形。

奴は笑いながら、俺達を楽しそうに遊びへ死と誘ってくる。

だが…

八幡「残念だが、無理だな。俺は、身内と以外で鬼ごっこやかくれんぼの類いには良い思い出が無いんだ。」

と、少女を背負ったまま不意打ち気味な回し蹴りを喰らわす。

蹴りを喰らった熊の人形は、普通では考えられない程の威力で弾け飛び、沈黙する。

八幡「つたく、何でアイツ等から誘った癖に俺の存在を忘れられるんだよ。三時間もずっと待ってたんだぞ、俺は…」

美琴「……………」

八幡「ん？どうした？」

美琴「な、何なんですかあのキック！何かこう、凄い威力でしたよ！普通、キックで人形をあんな事できませんよね！」

まあ、ごもつともである。

だが、単純な話だ。

八幡「確かに、俺は普通の人間よりは力が強いよ。でも、それ以上に…」

美琴「それ以上に？」

八幡「…唯、嫌われてるんだよ。人間にも、アイツ等にも。」

そう、それだけの話だ。

まあ、こうなる前から身内以外にはあまり好かれていなかったがな。

それよりも…

八幡「全然消えないな。元凶は倒したのに…」

美琴「ま、まだ終わってないんですか！」

八幡「どうやらな。だが、どうしって、直ぐにしゃがめ！」

美琴「へっ、はっ、はい！」

俺が叫んだ瞬間、先程まで俺達の首があつた場所に特大の斬撃が飛んでくる。

ちっ、そういう類いの手合か！

??? 『鬼ごっこじゃなくて、殺し合いごっこだね♪わーい、お兄ちゃんありがとう♪臭いも気配も嫌な気分になるし、吐き気を催す程に反吐が出るけど、大好きだよ♪』

八幡「はっ、そうかよ…」

お前なんか『お兄ちゃん』とか、『大好き』とか言われても嬉しくないんだよ！

美琴「えっ、何で!? さっき、派手に弾け飛んでバラバラになってたのに…」

八幡「…ルールだ。」

美琴「…ルール?」

八幡「とある法則性の上にある限り、奴は何度でも復活するって事だ。」

その分、ルールにのっとって倒せば良いだけだから、楽な相手でもある。

だが、それは奴の正体が解っている仮定の上での話だ。

??? 『じゃあ、行くよ♪お兄ちゃん達♪』

八幡「来なくていいぞ、ラリックマ!」

先程の様に、軽く奴をあしらう。

しかし、時間が経てば直ぐに復活するだろう。

だから、今の内に…

八幡「おい、一旦逃げるぞ!」

美琴「はっ、はい!」

—————

吹き飛ばされ、バラバラになった身体を再構成させるラリックマ。

『うふふ、強いねお兄ちゃん。アレの臭いと気配がするから当たり前なんだけどさ…』

少しだけ苛立ちを混じらせながら、ラリックマは笑う。

『でも、より楽しくなったよ。』

奴は笑う。これから始まる、楽しい愉しい遊戯を思い浮かべて。

『どっちが勝つのかな、お兄ちゃん？』

夜はまだまだ続く。

この悪夢の遊戯と共に…

続く

## 第5話 撲殺天使美琴ちゃんの片鱗

### 第5話

俺達はその場から脱出し、別の部屋へと逃げる。

負けるつもりもないし、負ける気もしない。

だが、奴の正体と法則性を見つけないければギリ貧なのは確かだ。

どうした物か…

「なあ、お前…」

「はあはあ、な、何でしょうか…」

「この子、オカルト好きか？」

「えっ？ いや、噂話とかは確かに好きでしたけど、その方面はそこまで好きっていう感じじゃなかったですよ。」

「そうか…」

なら、そういう類いの本はこの子の部屋には無さそうだな。

という事は、彼女は何かを使つて、あのラリックマを呼び出す方法を知った事になる。そんな事を考えていると、突然ピカツつと音を立てて、部屋に置いてあったパソコン

が起動する。

「きゃっ！つて、パソコン？もう、驚かさないでよお…」

「スリープモードになってた様だな。ん？この記事は…」

成る程、そういう事か…

「おい、これを見てみる…」

「は、はい。えっ、これつてもしかして…」

パソコンの画面には、『ひとりかくれんぼ』と題された遊びの仕方が映っていた。勿論、この遊び茶番を終わらせる方法も。

「これでラリックマの正体が解った。…奴を捕まえて燃やせば、全てが終わる。」

「じゃあ、由佳と私は助かるんですか！」

「ああ。まずは塩水だな。後、燃やせる様な場所を探さないとな…」

「暖炉！おじさんが殺されてた部屋に暖炉があります！そこで燃やしましょう！」

これで燃やす場所も確保した。

早く終わらせ…

「ちっ、今はお呼びじゃないんだがな！」

『見〜つ〜け〜た♪早く遊ぼうよ、お兄ちゃん♪』

「きゃっ！来ないで！」

俺が再び蹴り飛ばそうとする前に、彼女が近くの椅子をラリックマへと投げ飛ばす。

『火事場の馬鹿力』という言葉があるが、今の状況を表すのにピッタリの言葉だ。

勿論、椅子はラリックマへと直撃し、見事に静かにさせる。

い、意外と胆力が有るらしい…

「えつと、その、大丈夫か？」

「はい？…へ？もしかして、あれ私がやりました？」

椅子の下敷きになって沈黙するラリックマを見ながら、俺は無言で頷く。

「…塩水、作りに行きましようか。」

「……………おう。」

無言で、その場から立ち去る二人。

塩水が作れる場所へ辿り着くまで、静寂が二人の間を支配したらしい…

—————

そして、八幡は…

「昔から妹と従妹に女には逆らわない様に調き…教育されてきたが、本当にその通りだ  
と思った。あれは人間じゃない、撲殺天使だ。」

後にそう語る様になったのであった…

続く

第6話 『ひとりかくれんぼ』という遊戯の終了 そして、次の怪異は…

### 第6話

「よし、作れたな…」

「は、はい。そ、そうですね…」

あの重苦しい空気から解放されたが…

「……………」

「……………」

ぎこちなさだけは執拗に残ってしまふ。

こういう時、どうすれば良いのだろうか？

…考えても無駄か。今はラリックマを倒す事だけを考えよう。

それに、噂をすれば…

『あゝれ〜？何か雰囲気が違うね、お兄ちゃん♪もしかして、もう逃げない？』

「……………ああ。お前を捕まえなきゃいけないからな。覚悟しろ、ラリックマ。」

『警察ごっこだね、楽しそう♪』

その言葉を呟いた瞬間、俺達は同時に走り出す。

相手には刃物、此方は一人背負っているせいで両手が塞がっている。

だが…

「それがどうした!」

『流石だね、お兄ちゃん…』

奴の刃物を紙一重で避け、殺さない様に地面へと踏みつける。

よしっ!この状態なら…

「今だ!早く塩水を!」

「は、はい!」

女の子が口に含んだ塩水を、男が踏みつけている熊の人形にかけているという謎の構図。

そこはかたなく変な雰囲気になるが、今はそんな事を言っている場合ではない。

『足蹴にしたらだけじゃなくて、動かさなくするなんて、お兄ちゃんは変態さんだね♪』

「…さっさと燃やしに行くぞ。」

「…ですね。」

その後も…

『無視するな!』とか…

『変な性癖持ちの変態お兄ちゃん♪』とか…

『構え！遊べ！』とか脳に響く様な奇声を上げ続けるラリックマを無視し、暖炉がある部屋へと向かうのであった。

「何か疲れた…」

「私もです…」

暖炉がある部屋へやつと辿り着き、俺達はその場に腰を下ろす。

『あれ、最初にお兄ちゃんとおった場所だね？はっ、もしかして思い出の場所で私を踏みつけたかったの？』

「…早く燃やすぞ。」

「…あはは、ですな。」

変な戯れ言をほざくラリックマを無視し、奴を暖炉へと放り込む。

よし、後は…

「あれ？そういうえば、火はどうするんですか？」

「それならこれがある。」

一旦、背負っている少女を下ろし、懐から黒いライターを出す。

「これで、火をつける。奴が燃え尽きれば、この『ひとりかくれんぼ』も終了だ。」

そう告げながら、火を点火する。

すると…

「…そうですか。やった、これで…」

彼女はそう呟くと共に、地面へ倒れ伏す。

「おい！大丈夫か…」

慌てて近寄ると、良い顔で寝息を立てている。

どうやら、緊張の糸が切れてしまった様だ。

「全く、心配させやがって…」

こうして、呪われた夜は終わった。

だが、彼らは知らない。

本当の悪夢は、これからなのだ…

続く

## 幕間①

## 幕間 その1 八幡とラリックマ

その1

『あゝあ、もう終わりかあ。でも、楽しかったよ、お兄ちゃん♪』

「お前、まだ喋れるのか…」

身体の半分以上は燃えているのに、奴は愉しそうに俺へと話しかけてくる。

ああ、吐き気がする…

お前が、お前なんか俺を『お兄ちゃん』なんて呼ぶんじゃねえよ…

「この際だ、聞いてやる。ラリックマ、お前は何故俺をそう呼ぶんだ？」

そう聞くと、奴は嗤いながら…

『うふふ、何言ってるの？お兄ちゃんはお兄ちゃんなんだもん♪当たり前でしょ？』

「はあ？訳が解らん…」

『ええ、本当にいゝ？それとも、まだ気付いてないのかな、お兄ちゃん？』

本当にコイツは何を……………嘘だろ？

この感覚、この気配！まさか、アイツが…

『あはっ♪やっとな気付いた？鈍感なのは相変わらずなんだね♪』

『お前……………』

怒りが、憎しみが、俺の理性を侵食していく。

コイツ、何処まで俺を…

『あれ、もう時間かあ。』

『僕なら、僕が入ってた方と真逆の場所に居るから、頑張つてね。』

『『残念だけど、我とのお話タイムはここでオシマイ♪』』

やめろ、やめてくれ。それ以上、それ以上言うのは…

『バイバイ、ゴミいちゃん♪』

そう言い残して、奴は燃え尽きていった…

—————

「ふう…」

少々八つ当たりをし、警察の知り合いに通報した後…

俺は奴が言っていた場所へ向かう。

固く閉ざされた襖、その中からは濃いアイツの気配がする。

息を整え、決して迷わない様に…

…俺はその襖を開けた。

「今度はコイツか…」

そこには、スヤスヤと眠る幼女が居た。

俺が背負っていた少女と何処となく似ているから、おそらくは妹なのだろう。

…悪趣味な奴め、俺への嫌がらせか？

「まあ、良い。」

余計な思考を取り除く。

思い出せ、俺の目的を。迷うな、理性の怪物比企谷八幡。

目の前に居るのは幼女の皮を被った化け物だ。

「すまん、俺はお前の命を…」

手を構え、真つ直ぐ彼女の心臓へ振り下ろし…

「お兄ちゃん、大好き…」

「なっ!?!」

おそらく、寝言。だが、今の俺には…

「くそっ！ふざけるなあ！」

どうして、お前が…

俺を苦しめ続けるお前が、その言葉を呟くんだ！

俺から、俺達からアイツ等を奪った癖に…

どうして、そんな幸せそうに…

「はあはあ、ふざけるなあ！」

こうして、俺は彼女を…

幸せそうな寝顔を浮かべる命を奪おうする。

かつての、現在進行形のアイツの様に…

続く

## その2人物・怪異紹介

その2

登場人物紹介

①比企谷 八幡

言わずと知れた俺ガイルの主人公。

腐った目に、可愛いアホ毛を持つ少年であり、とある事件と怪異の影響でかなり人間を辞めている。そして、捻くれ度合いもベクトルが違った方に向いている。

現在の家族構成はペットのカマクラのみ。他の家族がどうなったかは本編で…

②姫野美琴

言わずと知れた怪異症候群の主人公兼ヒロイン。

ちなみに、作者は怪異症候群の女性陣で一番好きです。

怪異事件に巻き込まれ、終始八幡に驚かさされたりと不憫な娘。

だが、悔るなかれ。彼女には怪異特効の撲殺天使になる未来が…

おっと、これはまだ読者の皆様には未来のお話でしたね。

③神代 由佳

『ひとりかくれんぼ』を引き起こした長本人。

今回の章では最初以外、倒れていた為に全く喋っていない。

まあ、原作（ゲーム）でもそんな感じなので、気にしなくても良いかとも思ってる。

活躍は第2部まで待つてね♪

—————

登場怪異紹介

①『ひとりかくれんぼ』もといラリックマ

ラリックマという渾名が一番シックリくる怪異ナンバーワン（当社比）の熊の人形ちゃん。

とある設定により、妹キャラみたいな性格にされたが、原作ではそこまでキャラは濃くない。

原作ではチョロいし、めちやくちや油断しない限りゲームオーバーにはならないが、殺傷能力はちゃんとする。

手に持った包丁は、人間相手ならどんな奴でも切り裂く効果が付与されているのだが、八幡が強すぎて生かす暇も、描写する隙も与えて貰えなかった。

『ひとりかくれんぼ』をちゃんとした手順で終わらせない限り何度でも復活する事が出来るが、復活するまでにタイムラグがある。故に、怪異の中では割と攻略は簡単な方。





## 第1部 第2章 くねくね

## 第7話 特務課 警部補の氷室等

## 第7話

美琴 side

「うっ……」

真つ暗な世界から、目の前が明るい世界に変化していく。

私、いつの間に寝ちゃって……

「あれ、知らない天井だ……」

いや、ふざけている場合じゃない！

本当にここは何処……

「おっ、気が付いたか？」

私が混乱していると、近くから知らない男の人の声がする。

「……………貴方は一体？それに、ここは何処何でしょうか？」

「俺の名は氷室等、特務課の警部補だ。そして、ここは菊川警察署だ。」

えっ？何で私が警察署に……

「とある知人から通報があつてね。駆けつけたら、君と女の子が倒れてたんでここまで連れてきたんだ。」

知人：もしかして、あの人が…

「……………君には色々聞きたい事があるんだ。これといって怪我也無さそうだし、差支えがなければ今回の事件について話してもらいたい。」

その言葉に少し考える。

あんな出来事、絶対に…

でも…

「……………いいですよ。でも……………どうせ、信じてくれない…。私の言う事なんて…絶対……………」

しかし、彼は私の予想外な言葉で返してきた。

「…呪われた人形の事か？安心しろ。だからこそ、俺がこの事件の担当になったんだ。」

「……………えっ?」

それは一体、どういう…

「由佳くんから聞いたよ。『ひとりかくれんぼ』を遊び半分で作ったらとんでもないことになった、とな。」

美琴「…………ゆ、由佳が……………『ひとりかくれんぼ』を……………」

やっぱり、そうだったんだね。

でも、無事で良かった……

「君が巻き込まれたのは彼女の責任だ。だが、許してやってくれ。彼女は今回の事件を一生後悔する事になる。」

それは……解っています。

それに、私は……

「そんな時、君まで彼女を見離してしまったら……わかるね？」

「……はい！由佳、由佳は私の大切な親友ですから！」

そんな事、言われるまでもない。

あの子を、親友を見捨てる選択肢なんて、私には最初から皆無だ。

それはそれとして……

「あの……氷室さん……」

「なんだね、美琴くん？」

「どうして、私を信じてくれたんですか？こんな……普通だったら誰も信じない……」

警察の人だったら、尚更な筈……」

すると、氷室さんは少し考える素振りを見せ……

「神代家の……主人が心臓を刺殺された上に、執拗に殴打された死体。その上、その生首が

盛られた皿。風呂場には長男の切断死体。ご婦人は腹を刺されて転落死だ。これだけ見せられれば、君を疑う理由は何処にも無いよ。」

う、嘘……あの家でそんな事が……

おじさんだけじゃなくて、由佳のお兄さんやおばさんまで、あのラリックマに……  
「……………」

「俺の仕事は、証人者と事件の確認だけだ。……もう、お家に帰っていいよ。」

こうして、私は彼に出会った。

あの目が特徴的な男の子と同じく、この呪われた一年間を過ごし……

……私達を守ってくれる、氷室等という人に。

続く

## 第8話 青春は悪であり、嘘である

### 第8話

八幡 side

美琴が氷室等と出会っていた頃、八幡は…

【高校生活を振り返って】

二年F組 比企谷 八幡

『青春とは嘘であり、悪である。』

『青春を謳歌せし者たちは、常に周囲と自己を欺く。』

『自らを取り巻く環境のすべてを肯定的に捉える。』

『何か致命的な失敗をしても、それすらも青春の証とし、思い出の1ページに刻むのだ。』

『だが、それがどうしたのだ？』

『彼らは知らないまま幸せな日々を過ごしている。』

『糾弾されるべき嘘や欺瞞、秘密、詐術に満ちていながらも無知のまままでいられる。』

『某特撮の歌にある様に、知らないという罪と知りすぎる罍という物だ。』

『何も知らないからこそ日常を謳歌でき、知りすぎると罍に囚われないこそ安寧の

「ままで居られる。」

『これ程、素晴らしい事はないだろう。』

『だからこそ、声を大にして言いたい。』

『馬鹿な事をして俺に迷惑をかけるな！下手に首を突っ込んで俺の仕事を増やすな！若気の至りという言葉を盾にして、厄介を呼んでくるな！』

『それすら守れない様な奴等は…』

『滅びろ！』

「で、この舐め腐って中二病感満載な作文は何だ、比企谷？」

「はあ『高校生活を振り返って』ですか？」

「そう答えると、目の前に居る自分を呼び足した人物。生活指導の教員であり平塚静は頭を抱える。」

「全く、俺の何がいけないのだろうか？」

「君はあれか？テロリスト志望か？」

「いえ、専業主夫志望ですね。もう、ほぼ諦めてる様な物ですが。それに、これは俺が高校生活を振り返って思った事をぶちまけた結果です。つまり、俺は悪くない。それを認めない社会が悪いんですよ。」

「小僧、屁理屈を言うな。」

「良いじゃないですか、屁理屈。理屈どころか屁理屈さえも許さない理不尽が、この世には存在するんですから……」

そう答えると、平塚先生は更に頭を抱え始める。

いや、本当に俺が何かいけない事をしたみたいじゃないですか。

止めてくださいよ、本当……

「はあ、君のその妙に達観した様な雰囲気は何なんだ？」

『した様な』じゃなくて、してるんですよ。一身上の都合と、押し付けられた理不尽のせいで。」

だからこそ、俺は許さない。

今度こそ、俺はアイツを……

「君、怖い顔になつてるぞ……」

「ああ、すみません。……まあ、適当な物に書き直して来ますんで、もう俺は失礼しますね。」

「いや、少し待て。君に聞きたい事がある。」

凄まじく嫌な予感がする。

こんなにも嫌な予感がするのは、特務課のあの狸野郎に出会った時以来だ……

…おそるおそる、俺は平塚先生に聞き返す。

「……………何ですか？」

「君、部活に入っているかね？」

この一言が、彼を表側の青春へと誘う要因となる事を彼はまだ知らない。

そして、この表側も裏側という理不尽な世界へと巻き込まれていき…

続く

## 第9話 油揚げ

### 第9話

美琴 side

私は氷室さんの言葉に固まってしまおう。

えっ、本当に帰っていいの？

そんな私の様子に気が付いたのか…

「…こんな事、世間に公表できる訳がないだろう？ 報道規制も然り、警察署内は大慌てだ。」

と、氷室さんは少し疲れた笑みを浮かべる。

そ、そんな事になってたんですね…

「こう言っちゃ悪いが…君を襲った人形とやらも現実離れし過ぎて誰も納得しない。上辺だけを見れば、君が大量殺人の容疑者なんだ。」

「そ、そんな…」

確かに、その通りだ。

でも、それじゃあ…あんまりにも…

「無茶を言ってるのは解る。だが、君は今まで通りの学生生活に戻るんだ。こうして俺が一人で来たのも、事を穏便に済ませる為。大人数で君を囲んで尋問したり、監視したりもしないよ。」

私を安心させる為か、優しく諭してくれる氷室さん。

「こういつた怪異事件はね。静かにゆつくり時間を掛けて、世間に忘れさせる事が一番なんだ。」

こう言うと、少し難しい顔をして…

「…なに、心配はいらない。こういう事例は稀だが、君が初めてじゃないよ。」

「……私、以外にも?」

「………まあね。でも、ここまでの死者を出したのは俺が担当してから、彼等の事件以来かな?」

『彼等』、その言葉を口にした途端に、辛そうな顔を氷室さんは見せる。

だが、直ぐにその表情を消し…

「…まあ、念の為だ。俺の連絡先を覚えておく。」

「えっ、あ、ありがとうございます…」

「それと、近い内に君を呼ぶ事があるかもしれない。怪異事件に敏感な奴が居てな。詳しい話は、ソイツにしてやってくれ。」

「そう言い残し、氷室さんは部屋から出ていった……」

等 side

俺は部屋の外へと出る。

彼女にも一人で少し心を落ち着かせる時間が必要だろう。

そんな事を考えていると……

「……ようー！」

聞き慣れた声が、俺を呼び止める。

ああ、そうだった。完全に腐れ縁のコイツをど忘れしていた。

「そうだったな……。怪異に敏感な奴はもう一人居たんだった……」

「……はあ？いきなり、何言ってるんだよ……まあ、そんな事より例のお嬢ちゃんの様子はど

うだい？」

等 「相変わらず情報が早いな……剛。」

コイツの名は加賀 剛。オカルト専門のライターで、一部の層からは割と人気者らしい。

い。

後、何故か『油揚げ』という渾名をキャットツナというファンから付けられたらしい。

「ま、これといって目立った外傷はないよ。明日から普通の生活に戻らうさ。」

「…やっぱり、怪異か？」

お見通し、か。

確かに俺もお前も、色々な体験を…

「じゃあ、ちよつくら話でも…」

「軽率だぞ！暫くそつとしといてやれ…」

はあ、少しだけ感心して損した気分だ。

続く

## 第10話 初期から割と素直な雪ノ下は最強だと思っ

## 第10話

## 八幡side

「部活ですか？当然、入ってませんが…」

「そうか…実はな、君に入って欲しい部活があるんだ。」

えっ、何それ。面倒だなあ…」

「もう少しポーカーフェイスを学んだらどうだね？かなり駄々漏れだぞ、君。しかも、口にまで出してるし。」

「おっと、すみません。」

と、俺は少しおどけて見せる。

ん？そういえば、アイツが入ってる部活の顧問が確か…

「…良いですよ。早く案内してください。」

「えっ!?良いのか？」

「先生が誘ったのに、驚いてどうするんですか？」

「いや、素直に了承するとは思わなくてな。まあ、良い。着いてきてくれたまえ…」

平塚先生に案内された場所は、特別棟にある空き教室の一室だった。  
というか、見覚えがある。

やはり、ここは…

「ここだ。失礼するぞ…」

「先生、入る時にはノックする様に何度も言った筈ですが…」

先生がドアを開けると、その中にポツンと一人の少女が座っていた。

俺はこの少女を知っている。

ほぼ女子高と化している国際教養科のJ組に所属している学年一位。

誰もが目を惹かれ、見惚れる様な黒髪ロングの秀才美女。

彼女の名は…

「君はノックしても反応を返さないじゃないか。」

「反応を返す前に、先生が入ってくるんじゃないですか…。それはそれとして、隣の…あら？ゾンビが居ると思ったら、比企谷君じゃない？またカプコンの世界から追い出されて来たの？」

「誰がTウィルス感染者だ。…よう、昼休憩ぶりだな、雪ノ下。」

…彼女の名は、雪ノ下 雪乃。

この学校における、唯一無二と言って良い程の友だ：知り合いである。

「おや、君達は知り合いだったのか？」

「ええ、色々ありまして…」

「ああ。本当に色々あった…」

あれは面倒な出来事だった…

あのジャミラめ、お前は山の怪異だろうに…

何で町に降りて来てんだよ、お前は恐怖の森の顔面核兵器のお仲間か？

「その…色々の部分を聞いても良いか？」

先生が何故か神妙な顔をして俺達に問う。

すると、雪ノ下も何故か顔を赤らめ…

「色々と奪われたんです。色々…」

「おい、人聞きの悪い言い方をするな。」

「でも事実でしょう？」

「あれは治療行為だ。ノーカンだ。」

「ほら、貴方はそうやって直ぐ逃げる。貴方のそういう所、卑怯だわ。」

「卑怯で結構。俺はそういう男だ。」

「ええ、知ってるわ。たった一年分しか、貴方の事を知らない私でもね。」

と、長々とした掛け合いが続く。

こういったやり取りがどうしようもなく懐かしく、俺の心を癒していく。

この事は絶対に彼女には内緒だが…

「……………」

おや？平塚先生の様子が…

「ひ、平塚……先生……？」

「この裏切り者おーわーん！結婚したい……」

と、何故か号泣して逃げ出すのであった。

まあ、言える事はただ一つ。

早く誰か貰ってやれよ、マジで…

続く

# 第11話 迷子の迷子の美琴ちゃん

## 第11話

### 美琴 side

私は少しの間心を落ち着かせ、帰る準備をする。

時計を見ると、既に放課後の時間だ。

「はあ、いろはちゃんに色々と聞かれるんだろっうなあ…」

最近出来た友達いろはちゃんは、そういうのに敏感だからなあ…

言い訳、どうしよう？

そんな事を考えながら、外へ出ると…

「ちえつ。…まあ、その通りか。」

「ああ。お前は少しでも良いから自重を覚えてくれ。」

氷室さんと、知らない男の人が話していた。

「ん？もう平気なのか？」

「え？……おおっ！君が今回の怪異事件に巻き込まれたお嬢ちゃんかい？」

「えっ、えっ……」

思わず、固まってしまおう。

何この人、圧、圧が凄い……

ん？もしかして、この人が……

「……あの……氷室さん。私に会わせたい人って、もしかして……」

「安心しろ、全く違う。……すまないな、美琴くん。気を悪くしないでくれ。」

「確かに今のは俺つちが悪いかもしれないけど、その言い方はなくない？」

あつ、この人……多分面白い人だ、色々な意味で。

何故か、私は直感的にそう思った。

「……まあ、この通り物騒な世の中だ。良かったら、最寄の駅まで送ってあげるが……」

「無視すんなよ……てか、物騒ってのは俺の事か？冗談きついで……」

私は少しだけ考えるの。

うん、一人で帰ろう。

流石にこんな事で氷室さんの手を煩わせるのも忍びない。

「いえ、大丈夫です。一人で帰りますので……」

と、私は菊川警察署を出ていく。

その後ろで……

「……お前のせいだぞ、剛。」

「……………すまねえ。」

そんな会話が繰り返されているとは、汗にも思わず…

「やだ、どうしよう……」

警察署を出て、最寄の駅へ向かっていた私は…

「道に迷っちゃった……」

…見事、現在進行形で迷子です。

「やっぱり氷室さんに送ってもらえばよかったかなあ……」

後悔後先立たず、とはこの事だ。

でも、大丈夫。私にはスマホという文明の機器があるのだから…

「…あれ？スマホ、ない……………」

そうだった…急いで由佳の家に行ったから、お家に置いてきたんだった！

「仕方ない。真っ直ぐ進んで……」

私は諦めて、前に進み続ける。

しかし…

「相変わらず、田舎だなあ……」

昔ながらの家や畑、田んぼが広がっている。

小さい頃は、巨大な案山子とか怖かったなあ…

その時の私は、そんな楽観的な事を考えていた。

『n z : : q ! n z : : q !』

直ぐそこにまで、新たな怪異…

白き狂気が少しずつ、少しずつ近づいて来ている事に気が付きもせず…

続く

# 第12話 面倒事は向こうから

## 第12話

### 八幡side

平塚先生が飛び出ていったせいで、この場を静寂が支配する。

先生、マジでこの空気どうしてくれるんすか…

「…とりあえず、いつもの場所に座ったら。」

「…そうだな、そうするわ。」

と、いつもの定位置に座る。

この学校の昼休憩はベストプレイス（自分が勝手にそう呼んでる）場所か、ここで過ごすのだ。

割と陽が差し込んで来て、春とか冬とか暖かいんだよなあ、ここ…

「…ねえ、比企谷君？」

「………何、雪ノ下？」

「何でここに連れてこられたの？」

「いや、色々あって部活に勧誘されてな。お前が平塚先生が部活の顧問だと言ってた

の思い出して、大人しく着いてきたんだよ。」

他の部活ならいざ知らず、お前が居る所なら俺は別に構わないしな。

これも絶対に言わないが…

「そ、そうなのね。なら、改めて…」

雪ノ下は俺へと手を差しのべ…

「奉仕部へようこそ。部長として歓迎するわ、比企谷くん。」

「…ああ。こちらこそ、宜しく頼む。」

と、その手を握り返すのだった。

—————

その後、やる事も無いので雪ノ下が入れてくれた紅茶を飲みながら読書をつける。

「ふわあ…」

昨日、ラリックマのせいでロクに眠れていないせいか、欠伸が出てしまう。

「あら、眠いの？ 今日のお昼も眠そうだったのだけけど…」

「ん？ ああ、実はな。昨日、怪異絡みの事件があつて…」

俺は昨日の事を雪ノ下に話す。

コイツなら周りに言いふらしたりしない（そんな相手が居ない）し、信頼もしてるから大丈夫だろう。

「そう。またそうやって女の子を助けたという訳なのね、タラシ谷くん。」  
「何でそこだけ切り取るんですかね…」

悪意あるぞ、その切り取り方は…

剛さんの記事じゃあるまいし…

「で、その子にも私にした様な事をしたの？」

「する訳ないだろ。ラリックマとお前が遭った怪異じゃタイプが違う。」

お前の怪異の方が厄介さも格も桁違いだ。

中身がアイツじゃなければ、の話だが…

「そう、そうなのね…。うふふ（ポソツ）…」

しかし、何で嬉しそうなんですかね、この娘…

こっそりガッツポーズしてるの隠せてませんよ、雪ノ下さん。

「……おっほん。事情は解ったわ。寝ても良いわよ、比企谷くん。下校時刻になったら、私が起こしてあげるから。」

「そうか。なら、お言葉に甘えて…」

しかし、それは叶わなかった。

やはり、奴等は理不尽であり、現実はそう甘くないらしい。

「すまん、雪ノ下。俺、行かなきゃならねえみたいだ。」

「……………怪異絡み？」

「……………ああ。」

…どうやら、奴等は俺に休みを与えるつもりは皆無らしい。

ブラツク企業かよ…

続く

## 第13話 田舎は魔境

## 第13話

美琴 side

「駄目だ、全然駅らしき物が見えない……」

絶賛迷子中の私は途方に暮れていた。

真っ直ぐ進んでみたのは良いが、一向に目的地へと辿り着ける気配がない。

「どうしよう……」

そんな時、とある光景が目に入る。

「あれは……」

「どうやら、お爺さんが畑仕事をしている様だ。」

「そうだ！あのお爺さんに道を聞けば……」

「すみません、お爺さん！」

「……ん、どうした？そんなに大声出して……」

「あの、菊川駅ってどう行けば良いか知ってますか？」

「……菊川駅？そりゃ、ここからずっと真っ直ぐ西へ行けば着く筈だぞ。」

「そうですか、ありがとうございます！」

と、お礼を言つて立ち去る。

…あれ？

何か可笑しい様な…

「…気のせいかな。」

私はそう思う事にし、西へと進み始めた。

—————

私は言われた通り、真つ直ぐ進み続けた。

しかし、駅は見えて来ない。

それ所か…

「う、嘘でしょ…」

真つ直ぐ西へと進んでいた筈なのに、私の目の前に先程道を聞いたお爺さんが居るのだ。

気のせいと思い、西へと進んでも…

…必ず前にあのお爺さんの姿が映る。

「そ、そんな…」

もう、私は確信している。

現在進行形で、ループしていると…

「まさか、また…」

嫌な予感が、頭を過る。

でも、こんな連続して遭う物なの？

「…取り敢えず、またあのお爺さんに聞いてみよう。」

そう思い立ち、私は再びあのお爺さんへと話しかける。

「あの、すみません！」

「…ん？また、アンタか。一体どうしたの？」

「驚かないで聞いてくださいいね…」

私は先程から同じ所をぐるぐる回っている事をお爺さんへと伝える。

勿論、最初は…

「…は？もしかして、狐に化かされるとんじやないのか？」

と、ふざけた様に答えていたが…

「本当なんです、信じてください！」

「…本当かね？嘘じゃなからうね？」

「は、はい！」

すると、信じてくれたのかお爺さんは確めに行つてきてくれた。

そして、帰ってくる…

「…嫌な風がふくし、本当だったわい。」

と、言っていた。

しかし、直ぐにあっけらかんとした感じで…

「まあ、田舎には稀に起こる物じゃ。こげな変な事がな。」

「……………」

「ま、ワシらにはどうしようもないことだつて。こういう変な事は、ほっておくのは一番よか。」

「そうなんです…」

確かに、私には為す術がない。

これから、どうしよう？

そんな事を思っていると…

「ここでボケツと立つとくのもつまらん。事が静まるまで…私家で寛いできんしやい。」

「あ、ありがとうございます。」

こうして、私はお爺さんの家に行く事になった。

そんな時、ふと畑の方に目をやると…

「……………」

何か、白い物が……………」

続く

## 第14話 怪異と再従兄弟と地獄絵図

### 第14話

#### 八幡side

「…そう。なら、直ぐに行つて。後の事は、私がやっておくから。」

「ありがとう、雪ノ下。…行つてくる！」

「…ええ。行つてらっしゃい、比企谷くん。」

急いで、俺は部屋を出ていく。

まだ昼間だと言うのに、強力な怪異の気配がヒシヒシと伝わってくる。

ラリックマの件があつたばかりだというのに…

「げっ、アンタは…」

校門まで辿り着くと、一台のバイクが止まっていた。

サングラスを掛けたチャラそうな男と一緒に…

「よお、八幡。足は必要かい？」

「確かに必要だが、何でここに居るんだよ七望兄さん…」

コイツの名は、比企谷七望<sup>ななみ</sup>。

誠に遺憾ながら、俺の再従兄弟に当たる存在である。

俺と同じくアホ毛と腐った目をしており、俺と違って中々に性格が悪い奴だ。そして、あの夜で…

「ほら、早く乗れ。行くんだろ、怪異の所？」

「…そうだな、頼むぞ。」

渡されたヘルメットを被り、後ろへ乗る。

「乗ったな。さあ、振り切るぜ！」

「なっ、ちよっ、安全う…」

そう言い切る前に、コイツはバイクを走らせていく。

俺は固く誓う。

もう二度とコイツとは乗らねえ、と。

「場所は菊川警察署…菊川駅方面だな。」

「全く、命知らずな奴等だ。近くに特務課があるつてのに…」

しかし、近付けば近付く程に嫌な気配と臭いが増していく。

一体、何が起きてるんだ？

「血の臭いが濃くなってきてるな。後、これは多分だが…」

「…狂気の気配。」

怪異の中には、某TRPGの様にSAN値を削ってくる奴等が居る。

おそらく、今回の怪異もその類いだ。

「おっ、見えてきた…」

「これは…」

怪異の気配の発信源までかなり近付いくと、ドームの様な物が見えてくる。

おそらく、結界みたいな物なのだろう。

何かを閉じ込めているのか？まあ、俺達には無意味な物だ。

しかし、それ以上に…

「地獄絵図だな、八幡…」

「ああ、吐き気がする。」

ドームの様な物の前では、地獄が広がっていた。

『あはは、元気にしてたお婆ちゃん♪』

『会いたかったんだよ、お婆ちゃん♪』

と、老婆らしき生首を楽しそうにキヤツチボールして楽しむ二人組の少年達。

『あう♪あう♪あう♪』

キヤツキヤツはしやぎながら、ガラガラで女の人を叩き続ける赤ん坊。

『はあはあ、百回！ま、まだまだあ！』

と、熱血スポーツ物みたいな勢いで、自分の左腕を石で叩き続ける男。

他にも死体を食べたり、首を絞め合ったり、農具で生きている人を耕したりなど……異常としか言い様がない、狂気に満ちた空間が出来上がっていた。

「……早く終わらせるぞ、八幡！」

「愚問だな、七望兄さん。最初から、そのつもりだ！」

俺達はドームの中へと突入していく。

この中に潜む怪異を滅する為に。

続く

## 第15話 くねくね

### 第15話

### 美琴 side

遠くの方に、白いモヤの様な物が見える。

しかも、人型の様にも見える上に、まるで生き物の様に動いている様にも見える。

「……う？どげんしたかね、そんなところに立ち止まって。」

「あ、いえ……何かあそこに白いモヤみたいなのがあつて……」

「ん？……見えんばい。ちよつくら、眼鏡かけてみるか。どれどれ……」

お爺さんが眼鏡をかけて、あの白いのへと目を向ける。

すると、妙に黙りこくつてしまい……

「……お爺さん？」

『……わからナイほうがいイ……』

「……えっ？……ひつつ！」

片言で答えたお爺さんを思わず見ると、私は悲鳴をあげてしまった。

お爺さんの顔は見るからに可笑しくなつて……

『あつはは！今日は良い日ばい！あのお方に感謝を捧げなければ！』

そして、狂った様に笑い出し、出鱈目な方向へと走り出してしまふ。

「お、お爺さん!?!」

私がそうお爺さん呼び止めようとした時、嫌な予感が頭を過る。

そして、それを裏付けるかの様に：

『みつけたn z : q r 3 c — あそぼ@!』

「きやつ!」

遠くに見えていた白いモヤが声を発し、私へと向かってくる。

いや！何でまたこんな目に：

誰か、助けて：

「そこまでだ、クソ野郎!」

八幡 side

突入した途端、狂気の気配が濃くなる。

そして、別の怪異の気配まで感じてくる。

「一体だけじゃないね、これ…」

「…みたいだな。」

おそらく、狂気を振り撒いている奴と、この結界みたいなのを作ってる奴は別だ。協力体制だったら面倒だな…

『きやつ!』

「…ん?女らしき声が聞こえるな…」

「確かに…つて、この声は!?!」

物凄く、聞き覚えがある。

ていうか、アイツまた巻き込まれてるのかよ!

流石に可笑しいだろ!

「七望兄さん、早く飛ばせ!」

「最初から、そのつもりだよ!」

幸い、人の目も無いので全速力でバイクを走らせてもらう。

…間に合え!

「見えた!行くぞ、八幡!」

「ああ!」

「そこまでだ、クソ野郎!」

全速力のバイクで、奴に体当たりする。

紙一重で避けられるが、どうやら切り離す事には成功した様だ。

「よう、今日の深夜ぶりだな。」

「あつ、あの時の！それに増えてる…」

「えつ、知り合い？お前、やっと友達できたの？俺と違ってやればできる男だとは思ってたけど、本当に良かった…」

「違う！今日の午前深夜に会ったばかりだから、ほぼ初対面だ。知り合いも友達もあるか…」

今の所、そういう存在は雪ノ下だけだ…

彼女がどう思っているかは解らんし、最初は友達になる事を断られたし…

「…まあ、茶番はここまでにしよう。さて…」

「アイツ、『くねくね』だな…」

奴から発せられる狂気の波動、白いモヤみみたいな人型の怪異。

間違いなく『くねくね』だろう…

だが、どこか違和感が…

「さて、覚悟をしろよ『くねくね』。さあ、お前の罪を答えろ！」

「数えろでも、教えてでもないんだな…」

コイツ、久しぶりにW見たな…

続く

## 第16話 同族と同属

### 第16話

このバカ再従兄弟はほっておいて、『くねくね』へと向き合う。しかし、奴は何故か微妙に震えている？何あれ、バイブかな？

…ん？もしかして、アイツ……

『いややめてe7!b0e!いじめed@/ないuew@!』

と、叫びながら『くねくね』は逃げていく。

解つてはいるが……

「なあ、八幡……」

「何だ、七望兄さん……」

「アイツ、酷くない？やっぱり、怪異は理不尽だわ……」

「同感だ……」

「これじゃあ、まるで……」

……俺達が苛めている側じゃねえか。

「あの……えつと……大丈夫ですか？」

「ああ、気を使ってくれてありがとね。大丈夫だよ、慣れてるし…」

「人間相手でも似た様な反応返される事もザラにあるしな。」

「……………」

く、空気が重い…

『くねくね』め、こんな空気にしやがって…

「…おっほん。ま、まあ、色々と言いたい事や聞きたい事が各々有ると思うから、彼処にあるコンビニに寄ろうか…。確か、フードコートがあるタイプだし。」

「……………ああ。」

「……………はい。」

悔しいが、流星は喋れるボツチ。

こういう時だけは本当に役に立つ。もう少し、現実的な面で日頃から役に立って欲しい物だ。」

「口に出てるからな、八幡。後で覚えてろ、クソガキが…」

「すまん、本音がつい漏れた。直ぐに忘れる様に努力するよ。」

「……………仲、良いんですね。」

良くない、付き合いいこそ長いけど…

—————

「人、居ませんね…」

「…こりや完全にゴーストタウンだね。」

「…まあ、早く座ろうぜ。」

おそらく、人は『くねくね』が狂わせた後、別の怪異が結界の外へと排除しての  
ろう。

全く、回りくどい事を…

「…さて、じゃあ自己紹介から始めようか。」

「…は？」

何でそんな事を…

「いや、どうせお前の事だからしてないんだろなって思つて…」

「理由になつてねえぞ、クソ大学生。」

「はは、言うねえクソ高校生。」

つて、今は喧嘩してる場合じゃないだろ！

…はあ、仕方ないか。

「…比企谷 八幡。」

「で、俺がコイツの再従兄弟な比企谷 七望だ。」

「あつ、えつと、私は姫野 美琴です。」

姫野？何処かで聞いた事がある様な…

「よし♪宜しくね姫野くん。さて、何があつたか話してくれるかい？」

姫野は今までの事をかいつまんで話してくれた。

ずっと、ループし続けていた事。

そして、『くねくね』によって目の前で人が狂う瞬間を見てしまった事。

コイツ、相当肝が太いな。

二回目とはいえ、短時間の間でこんな目に合い続けているというのに…

そんな事を考えていると…

「何だ、先客が居たのかい…」

と、コンビニに見知らぬオバサンが入ってくる。

「…あつ、まだ残ってる人が「しつ、直ぐにここを出るよ、姫野くん。」えっ？」

「コイツの言う通りだ、行くぞ…」

困惑する姫野をひっぱり、コンビニから出る。

…ヤバいな、あのババア。

「な、何で出たんですか？失礼ですよ！」

「失礼も何もないよ、あんな奴。」

「ああ。アイツの身体、死の臭いと気配がこびり付いてた。」

「えっ、それって……」

間違いなく、あのババアは俺達と同じ……

……人殺しだ。

続く

## 第17話 ナチュラルな下の名前呼び

## 第17話

少しの間だけ、空気が重くなる。

当然だ。

直ぐ近くに怪異だけじゃなく、殺人犯が居ると言っている様な物なのだから…

「仕方ない、少し離れよう…。彼処に在る公園で話の続きでもするか。」

「…だな。ほら、姫野。早く行くぞ…」

「…はい。」

近くにあつた公園に行き、俺達はベンチに座る。

何故か七望の奴が姫野を俺の隣に座らせたのだが、何がしたいんだコイツ？

「…まあ、あのババアは放っておこう。今は『くねくね』について考えようか。」

「…そうですね。…あの『くねくね』もラリックマみたいなタイプなんですか？」

「いや、違う。あれは普通に倒せば終わるパターンだ。」

問題が有るとするなら、奴が全力で俺達を避けている事だ。

さつきから気配こそ感じるが、一向に近付いてきやしない。

「だね。後はこのループ空間だけど…」

「何かあるんですか？」

「これを仕掛けた奴の気配はするんだが、『くねくね』の奴と違って特定できん。どうやら、コソコソ隠れてるみたいだ。」

一番面倒なタイプだ。

やることやつてる癖に逃げる最低のクズみたいな物で、一番質が悪い。

まあ、こういう相手は…

「特務課の人達に任せるか…」

「えっ、氷室さんの事知ってるんですか？」

「知り合いだ。昔色々あつて、厄介になつた事があつてな…」

あの人達には本当に世話になつた。

小暮だけは好かないが…

「よし！電話してくるから、その間頼むね…」

と、七望兄さんが少し離れる。

そして、一時的に二人きりとなり…

「あ、あの…」

「ん？何だ、姫野？」

「世話になったたって事は、八幡さん達も怪異事件に巻き込まれたって事ですよね？」  
「それはそうだが…」

この子、何でナチュラルに下の名前呼び？

チャラ男モドキな七望兄さんすら出来ない芸当だぞ!?

「どうかしましたか?」

「いや、その、下の名前で…」

「へっ?…ああ、同じ名字なのでややこしくなると思つて…。ダメでしたか?」

と、姫野は聞き返してくる。

あざとい!あざといぞ、この娘!

しかも、これ間違いなく天然だ!小町達とは違つて計算高さを一切感じない…

どうしよう、これ…。助けて雪エもん!

「……………」

「…………いや、それで良い。」

結局、俺は諦めた。妥協、万歳。

俺の座右の銘は『押ししてダメなら諦めろ』なのだ。押ししてもダメそうな相手なら、即諦める。

これはかなり大事な事だ。女が相手なら、特に。

「…話を戻しますね。…八幡さんが遭った怪異は、どんな怪異だったんですか？」  
「それは…」

俺は言葉に詰まる。

どんな怪異と言えば、隅の隅まで語れるだろう。

だが、それは…

「…すまん。あまり言いたくない。」

「あつ、すみません！聞いてあげない事を聞いてしまったみたいで…」

「…気にするな。未だに乗り越えられてない俺が悪いだけだよ。」

そう、これは俺自身のせいであり…

…俺自身が背負うべき呪いであり、罪なのだ。

だからこそ、俺は奴を…

『ハチコマチャンネル♪』

「きゃっ！」

「うおっ！な、何だ、いきなり…」

そんな思考を遮る様に、近くのごみ捨て場の方から変な音声が届く。

しかも、この声は…

『本日の犠牲者を紹介しちゃうよ♪』

『目を離さないでね、お兄ちゃん達♪』

「また、お前か…」

どうやら、この件にも奴が絡んでいるらしい。

続く

## 第18話 NNN臨時放送

### 第18話

「おーい、変な声が聞こえたんだが…」

ごみ捨て場から忌々しい声が聞こえたと同時に、電話が終わったらしい七望が帰ってくる。

俺は、無言で元凶を指を指して答える。

「ん？って、何だこのテレビ？電源がついて…」

そう、あの忌々しい声はごみ捨て場に投棄されていたテレビから発せられていた。

しかも、そこには『本日の犠牲者』という悲惨なタイトルが出ている。

悪質な天気予報もあつた物だな…

「…成る程、『NNN臨時放送』か。」

「…NHK？」

「いや、違うぞ姫野。そういう怪異現象があるんだよ。深夜に砂嵐状態になったテレビがいきなり切り替わって、今みたいに犠牲者の名前を言っていく質の悪い嫌がらせだ。」  
と言つても、ここに書いてある名前は本当に死んだ人々なのだろう。

おそらく、『くねくね』に狂わされた人達の…

『姫野 美琴（16）、お兄ちゃん達にひつつく悪い雌！』

「ひっ！わ、私の名前まで…何か酷い事まで言われてるし…」

「気にするな。そういう嫌がらせだ…」

「この声にこの台詞…。やはり、お前か…」

どんどん怒りが沸いてくる。

早く終わってくれ。その声で、そういう事をする茶番劇はもう沢山だ。

『最後にお兄ちゃん達♪まあ、これだけは外れそうだね♪お兄ちゃん達は死ねないもんね、愛しの私達に出会うまで♪』

「……………」

奴がそう発した瞬間、テレビに向かって蹴りを叩き込む。

兄さんも俺と同時に叩き込み、原型を留めていない位に壊れ果てる。

「はあはあ、ふざけやがって…」

「クソが……………」

落ち着け、これは唯の嫌がらせだ。

それに今は姫野が居るだろうが…

「あの…二人とも、大丈夫ですか？」

「……………もう、大丈夫だ。」

「ごめんね、姫野くん……………」

少しの間、重苦しい空気がこの場を支配する。

自業自得とはいえ、キツイなこれ…

「ふう、落ち着いた。」

「すみません、何か奢ってもらって…」

「気にするなよ、姫野。むしろ、搾り取る位の勢いでいけ。」

「ははっ、良いねそれ。じゃあ、まず先にお手本としてお前から搾り取ってやろうか？」

と、俺達は落ち着く為に、飲み物を買って（七望の金）飲んでいた。

因みに、俺達はマツ缶で姫野はココアだ。

「さて、等さんからは色々と話した。あの秘密兵器持って此処に駆け付けてくれるそう  
だ。」

「…そうか。なら、この閉じ込めてくる奴は何とかなりそうだな。」

あれ、かなり強力なんだよなあ。めっちゃ煩いけど…

「秘密兵器、ですか？」

「ああ、怪異特効のな。等さんの親友である霧崎翔太って人と…」

「俺の合作なんだ！まあ、まだまだ改良すべき点とか沢山有るけどね。」

「そうだな。特に開発者から改良すべきだと思っぜ。」

「はは、そういうお前も改良したらどうだ？」

「…本当に仲良いんですね。」

「よくない！」

全く、何処をどう見たらそう取れるのか…

つて、話が逸れたな（逸らした張本人）…

「…はあ、だから今後の方針を言うぞ。」

「俺達から逃げてる『くねくね』をブツ潰す、だろ？」

正確には、『夜が来るまで』だろうけど…

続く

## 第19話 『くねくね』の怒り

### 第19話

「倒せるんですか？ ラリックマの時みたいに面倒な手順とかは…」

「必要ない。今回は倒せば終わりな奴だ。」

まあ、普通の人間ならその土台に立たせてもらえないタイプでもあるが…

「問題は、奴が俺達を避けてる事なんだよね。」

「そこなんだよなあ…」

近くに気配自体は感じるが、全く近付いて来ないんだよなあ。

当然と言えば当然なのだが、やはり俺達は怪異にすら嫌われている様だ。

「ん？ 七望兄さん…」

「…ああ。『くねくね』の奴が離れていつてる。」

俺達を狙うのを止めたのか？

いや、違う。

奴が出すとある感情の気配が、どんどん強くなってる。

「七望兄さん、行こう。」

「ああ、追いかけた方が良さそうだ…」

「何か起きてるんですか？」

「…まだ解らん。だが…」

だが、これだけは言える。

「奴は怒っている。しかも、あの怒りは…」

俺達と同じ、俺達の中でずっと燻り続けている…

「…『理不尽』への怒りだ。」

…同じ増悪と悲しみに満ちた怒りだ。

「ふう、ここだな。」

「あ、あの、すみません。私が遅いせいで…」

「気にするなよ、姫野くん。八幡の奴も役得だろうし…」

黙れ、クソ野郎。

俺達の速度だと、姫野をおいてけぼりにしてしまう。

だからって、おんぶはないだろ…

後、チャラそうに見えて、身内以外の女に免疫が無いから俺にやらせただけの癖に…

注) 七望は誰にでも『喋る』事は出来ませんが、身内以外への女性への対応はクソ雑魚

(スライムレベル)です。

「しかし、墓場か……」

奴の墓でもあるのか？

何か、皿屋敷の幽霊が出そうな井戸も……

「あの井戸、何か居たな……」

「……ああ。でも、既にお引越した後みたいだね。」

しかも、死の臭いまでしやがる。

そして、この井戸に残る怪異の気配は……

「『くねくね』は元々、此処に居た？」

「えっ、それじゃあ……」

それでも、奴は出てきた。

つまり、それ相応の理由と、害意を持つて。

「何だい、アンタら。こんな所にも居るなんて……」

と、いきなり話しかける。

この声、あのコンビニの！

「ちっ、怪異の気配に気を取られ過ぎたか！」

「姫野くん、俺達の後ろに……」

「は、はい！」

と、姫野を後ろに下がらせて、目の前にいる女に警戒する。

コイツから発せられる狂気の気配、何処となく奴に似ている。

つまり、コイツは…

「何だい、その目は？まるで、化け物を見る様な目じゃないかい…」

「その通りでしょ、ババア。」

「同感だ。アンタ、あの『くねくね』について知ってるだろ？」

その問いをした瞬間、奴は急にキレ…

「違う！奴は『くねくね』なんかという作り話の存在じゃない！そんな事も解らないなんて、アンタ達も出来が悪い子なんだねえ！」

と、捲し立てる。

ああ、俺は確信した。確信してしまった。

奴の怒りが、誰に向いているのか。理不尽を奴に与えたのが誰なのかを。

「あの井戸の中にはアイツが居た！でも、居なくなってたんだよ！ずっと、ずっと十数年も残り続けてきたのに！」

残り続けてきた物。それこそが井戸から感じる死の気配の根元。

そして、『くねくね』の…

「私が殺した！自分の手で殺した子供のね！」

狂っていた。『くねくね』に狂わされる手間も要らず、この女は狂気に満ちていた。

「…そうか！アイツを出したのはお前達か？」

「えっ？」

「そう来るか…」

「全く、質の悪いクレーマーだ。」

思考が支離滅裂になってるな、コイツ。

それに、遅かれ早かれ奴は出てただろうさ…

「さて、観念しなガキども！」

『それはおまえだ c ; ; f 6 ; j 5 q @ ! ! 』

「えっ？ぎやあああ！」

…今お前に起きているそれと同じ事を、お前にする為に。

続く



「遂にマトモな言語すら喋れなくなつたか…」

「おそらく、奴が自身の目的を果たしちやつたからだろうね。」

最早、狂気の根元は消失し、奴は理性のない白い怪物…

…目の前に居る全てを、自分自身さえも壊し尽くす理不尽へと成り果てた。

「…八幡。」

「…解つてる。姫野を頼んだ…」

安心しろ、『くねくね』…

…俺が、直ぐに終わらせてやるから。

『あつ、ああ…』

「もう良い、眠れ。」

俺の拳が、『くねくね』を貫く。

奴の身体は少しずつ崩れていき、灰になる。

そして、風に飛ばされて行きながら…

『あ、ありがとう…』

「お前…どういたしまして。」

お前もせめて、今は安らかに眠れ。

お前は怪異だが、理不尽の被害者という面では同族なのだから。

――  
奴を倒した後、サイレンの様な音と共に特務課の人達が来た。  
等さんだけでなく、剛さんまで来ていた。

何故だ？

まあ、色々あつたがコレで『くねくね』の事件は終わりだ。

早く家に帰って、カマクラに…

「比企谷兄弟、お前達も一緒に来い。流石に色々聞きたい事がある。」

「マジかよ…」

「終わらせてないレポート有るのに…」

全く、面倒な…

「そのかわり、今日の晩御飯は俺達が奢る。勿論だが、美琴くんの分もな。」

「あ、ありがとうございます！」

「恩に切ります、等さん!!」

手のひら、クルックルである。

この人、以外と寿司屋とか良い所に連れてつてくれるからな。これは仕方がない事だ。

『出発進行♪』

「「ん？」」

「三人とも、どうかしたのか？」

いや、今駅とか聞く様な声が…

「…いや、何でもないです。」

「俺もだ。少し疲れたのかも…」

「まあ、今回は肉体というより精神的にクする奴等だったもんね…」

今の所、怪異の気配はしない。

だから、気のせいという事にしておこう。

警戒し過ぎて疲れたら、戦おうにも戦えなくなるしな。

今の所は、だが…

「なあ、君達は何処に行きたい？」

「ど、何処でも良いですよ。」

「サイゼ!!」

「やっぱり、仲良いんですね、お二人とも。」

「よくないよ、こんな奴…」

全く、蕁麻疹が出るから止めてくれ。

続く

## 幕間②

## 幕間 その3 千葉の国宝 サイゼリヤ

その3

サイゼリヤ、それは千葉の国宝。

財政難な高校生達にとって、安く美味しい飯を提供してくれる至高のレストラン。  
そんな場所に今俺達は…

「あの、お先に…」

「ああ、俺達は全部メニューが脳内にあるから、大丈夫だ。だから、それはお前が使え。」  
「そうそう。」

もう、何度此処に来た事か。

妹達にはウケが悪かったけど、七望兄さんとはかなりの頻度で行っている。  
主に奢って貰う為だが、金があると直ぐに割勘にしてくるからな、コイツ…  
年上なんだから、奢れよ…」

「聞こえてるぞ、クソガキ。」

「おっと、すまん本音が。だから、これからも頼むね、奢り谷兄さん。」

「誰が、奢り谷だ！ ていうか、俺がそうなら、お前もそうなるだろうが、卑し谷！」  
と、毎回こうなるんだよなあ…

何でだろう（元凶）？

「お前ら、静かにしろ…」

「はい。」

「ふふ、仲良いんですね…」

違うから…訂正するのもうメンどいな。

「そーいや、剛さんは？」

「無断で奢られようとしてたから、先に特務課へ返した。」

「…成る程、剛さんらしいね。」

あの人、お調子者な所を直せばカッコいいと思うんだけどなあ…

だから、一部のファンとかに油揚げとか呼ばれるんだろうし…

しかし、キャットツナさんは本当に剛さんの事が好きだよなあ。

早く付き合えば良いのに…

「じゃあ、俺はディアボラ風ハンバーグで。」

「俺はリブスステーキとほうれん草のソテー。」

「わ、私はカルボナーラで。」

「そうか。俺は…イタリアンハンバーグと辛味チキンにするか。」  
と、各々が好きな物を頼む。

野菜を頼んでるの七望兄さんしか居ない上に、相変わらず等さんは辛いのが好きなのか  
…

姫野は妥当ちや妥当か。

小町達とかもデザート込みでよく頼んでたし…

「ふう、美味しかった。」

「久しぶりに大人数で食べたね。家族を除けば、給食以来かな？」

「えっ、そうなんですか？」

「……………」

姫野の本気で疑問に思っただけで、俺達は沈黙する。

中学の時は色々あったものもあるけど、一度誘われたのを断ったら二度と呼ばれなくなっただよなあ…

「まっ、色々あるんだよ。それに、最近は何だかんだに絡まれて、無理やり連れていかれるし…」

「…だよな。行っても『何で居るの?』って空気と目線がダメージ与えてくるし…」

「……………はあ。」

自爆した、連鎖誘爆した。

まあ、良い。今は美味しかった料理の事だけを考えるんだ。

「あ、あの、何かごめんなさい…」

「いや、大丈夫。慣れてるから…」

「いや、大丈夫な要素がどこにも無いぞ、比企谷兄弟…」

こうして、自爆しながらも楽しい時間は過ぎ去っていく。

例え、それがほんの僅かな時間だったとしても…

続く

## その4 人物・怪異紹介（第2章版）

その3

登場人物紹介

①比企谷 七望

比企谷 八幡の再従兄弟であり、大学生。

八幡とは違って理系だが、流石に赤点を取る程じゃないし、何なら器用貧乏なまでである人。対人関係を除けば、だが：

所謂『喋れる』コミュ障・陰キャであり、特に女性相手の接触とかはスライムレベルで耐性が皆無。それこそ、いわ・じめんタイプのポケモンに水タイプの攻撃をするが如くである。

雪ノ下陽乃と同じ大学に通っており、しよつちゅう霧崎翔太という先生の所へ入り浸っている。

陽乃とは面識自体はあるが、八幡が雪乃と仲が良いのは互いに知らない。

チャラ男な雰囲気とグラサンを除けば、かなり八幡とそっくりであり、目とアホ毛に至ってはほぼ同一。

そして、彼も八幡と同様にとある怪異の影響で人間を辞めており：

②氷室 等

後に『怪異症候群2』にて主人公を勤める事になるイケメン警部補。

菊川警察署にある怪異専門の部署、特務課に勤務しており、とある事件で比企谷兄弟と関わる事となる。

彼らの事を気にしており、中々の兄貴っぷりを発揮しており、彼らも口には出さな  
いが慕っている。

辛い物が好きで、最近は麻婆拉麺という地獄の様な料理にハマっているらしい。

加賀 剛と霧崎翔太という親友がおり、彼らとは高校からの長い付き合いである。

③雪ノ下 雪乃

俺ガイル側のメインヒロインであり、原作では見事八幡の愛を勝ち取った。

八幡は原作通り事故にあっており、その時に知り合った。

その後、『ヤマノケ』という怪異に襲われた時に八幡に助けられた。

その時の姿が目焼き付いて離れなくなり、一年の後半の頃には完全に惚れていた。

その助ける方法が色々アレな方法だったため、『せ、責任を取ってちょうだい！』とア  
プローチしているが、効果は微妙。

だが、かなり信頼してくれている事は感じ取っている為、もう少しで王手だとも思っ

ている。

まあ、現実はその甘くないのだが：

④ 加賀 剛

フリーのオカルトライター。

お調子者で、時々特務課や比企谷兄弟に迷惑をかける事もあるが、嫌われてはいない。割と人気で、キャットツナというファンから油揚げという渾名を貰った。

小学生の頃からの付き合いである幼馴染の少女が居るが、彼女がキャットツナだという事に未だに気がついていない（彼らの知り合いは殆ど知ってる）。

⑤ 保坂 里美

本編では誰も本名では呼んでくれない人。

かつて、障害を持った実の子供を、ストレスに負けて殺しており、井戸に遺棄していた。

その行いによって狂い、狂わせる者に殺される事になるとは：  
何とも皮肉な運命である。

—————

登場怪異紹介

① 『くねくね』

白き狂気。

その狂気は伝染し、近くに居る全ての人間を狂わせてしまう。

奴の正体は『理不尽に殺された子供達の怨念』の集合体である。

かつて、子供を親の為に殺す『子殺し』という風習が存在した。特に障害を産まれながらに持った子が対象となり、畑の案山子代わりとして使う農村も少なくなかったという。

そして、それにぶら下がったまま抵抗している姿こそが、『くねくね』の原型である。今回の『くねくね』は、実の母親に心無い迫害を受けた少年の残留思念を格として実体化しており、復讐を果たした後はただ暴れる化け物と化してしまい、その隙を八幡に倒された。

いつの時代も、人の想いは善くも悪くも強い物である。

そういった物が、彼らの様な『加害者になるしかなかった被害者』を産むのだ。

彼が暴走するまで喋っていた言語は、F G Oのラフム語である。

## ②NNNN臨時放送

とある深夜の砂嵐状態から突然切り替わり、今日の犠牲者を告げてくるだけの怪異。それ以外は無害なのだが、今回だけは本当の事を表示していた。

声はとある者達の声であり、それが原因で比企谷兄弟をキレさせた。

実はとある怪異が干渉しており：

③ ループさせてた怪異

今の所、正体不明。

だが、七望と霧崎 翔太作の秘密兵器によって追い出された。

しかし、まだ倒された訳ではない。

④ 狂った人達。

『くねくね』に狂わされた人々。

もう二度と正気に戻る事はなく、一生病院生活を送る事になるだろう。

逆に死ねた方が幸運なのだろう。

因みに、お婆さんの生首でキャッチボールをしている彼らはSCP—970—JP

『老狩る雪合戦』が元ネタ。

続く

## 第1部 第3章 猿夢

### 第21話 連続する怪異の謎

#### 第21話

『くねくね』の事件が終息してから数時間後：

美琴ちゃんは疲労によりすやすやと眠りにつく。

一方、八幡は慢性的な寝不足と昨晚の事件による睡眠時間の減少が重なっていた所を、見かねた七望に眠らされた。

そんな中、特務課では…

「で、どうなんだ霧崎？今回の怪異は…」

と、問われた男の名は霧崎 翔太…

…怪異を専門に研究する民俗学者である。

「昨晚の怪異と、今回の怪異。美琴ちゃんは2日連続で怪異事件に巻き込まれてる。こんなの馬鹿げてるぜ。」

「そうですね。俺達みたいにくわわれてる訳じやなさそうなのにアレなのは異常ですよ。」  
「専門家とやらの意見を聞いてみたいね。」

と、剛と等、七望から催促される翔太。

…そして、彼はゆっくりと持論を語り出す。

「…『くねくね』は利用されたに過ぎない。これは俺の推測だが、彼女は何らかの切欠で、俺達の手を負えない程の怪異を呼び寄せてしまった。勿論、比企谷兄弟は別かもしれないがね。」

専門家が手に負えないという程の怪異…

それ程の怪異でも別枠扱いされると言う事は、比企谷兄弟はそれ程まで怪異に強いのだろうか？

「どういう事だ!？」

「まず、神代家で起こった殺人事件。これは『ひとりかくれんぼ』によって引き起こされた怪異による犯行だが…」

あのラリックマによる殺人事件。

奴の犯行により、あの家の住人の殆どが仏と成り果てた。

「次に今回は菊川市での集団発狂失踪事件。…これは何だ？あまりにも突然すぎる。」

確かに脈絡が無いと言えは無い。

これでは、まるで規則性のない災害の様な物だ。

「そもそも一般人が怪異に遭遇する確率は何百万分の一だ。それが連続で続くのは偶然

ではあり得ない。」

「それは俺も同感だ。こんなの例を見ないぞ。」

と、等の言葉に他の二人も頷く。

そうだとすると、これらの怪異事件は何者の意図が絡んでいるという事になるが…

「こうなるとやはり、最初の事件…『ひとりかくれんぼ』が全ての始まりの元凶だ。」

「確かに、その可能性が一番高いか…」

「つて、それじゃあ神代家での事件はまだ終わってないつて事かよ!？」

「…成る程、俺も一度行った方が良いかもね。」

と、翔太の結論に各々の声を述べる。

「そして、はつきり言おう。これは比企谷兄弟を除いた俺達が今まで遭遇してきた怪異とは比べ物にならない。」

「「……………」」

その言葉に三人は黙ってしまふ。

だが、それでも翔太は言葉を続ける。

「何が原因かは解らん。だが、あの事件で大きな怪異が動き、今でも彼女に纏わり付いている。七望、そうだろう?」

「…正直、微妙。八幡のいうラリックマや『くねくね』達の気配がこびり付いてたから解

りにくかったよ。だけど、微かにそれらしき異様な気配が在ったよ。」

成る程、奴等がカモフラージュになってた訳か…

「つて事は、まだ終わりじゃないつて事かよ?」

「おそらく、な。それに『くねくね』の件だつて、何も解決はしていない。原因は不明な上に、規模は最悪ときた。それに比企谷兄弟に守られてたとはいえ、彼女は奴と見ても発狂しなかつたんだぞ?」

その通りだ。

そもそも、『くねくね』は本来なら問答無用で周囲を狂わせる怪異だ。

普通の人間なら、狂わない筈がないのである。

「結論付けるなら、これ以上彼女に関わるとヤバいつて事だ。」

続く

## 第22話 姫野 美琴の謎／出発進行♪

## 第22話

重苦しい空気がこの場を支配する中、それを遮るかの様に等が持論を話し始める。

「…こうは考えられないか？ 彼女は一般人と比べ、怪異に免疫があつた。」

「…成る程、俺と八幡みたいな感じですね。」

「ああ。そして、お前達と同じ様に強大な怪異に目を付けられてしまった。」

「だから、『くねくね』の事件が起こつたって寸法か！」

その持論を聞いた翔太は少し考える様子を見せ：

「…面白い考えだ。だが…」

「…ん？ ちよつと、待つてくれ。確か、『ひとりかくれんぼ』を實際にやったのつて、神

代 由佳ちゃんだろ？ なら、原因はそつちにも有るんじゃないのか？」

「神代？ 何処かで聞いた事がある様な…」

「むっ、一理あるな。」

翔太が何かを話そうとするのを遮り、各々が気が付いた事を伝え合う。

しかし、七望は『姫野』だけでなく『神代』にも聞き覚えがあるのか…

「聞け、お前ら。今は怪異に対する免疫などの話は置いておき、今までの事実と謎を並べていくぞ。」

と、彼は言い纏め始める。

① 『姫野 美琴に起こる怪異連鎖現象』

② 『菊川市で比企谷兄弟が守っていたとはいえ、彼女だけが助かった事実』

③ 『そもそもその発端は神代家での怪異事件』

④ 『最初の怪異を呼び寄せたのは神代 由佳』

「…以上だ。」

「…さっぱり、解らん。」

「…実は俺もまださっぱりだ。」

そんな不安を煽る様な事を言いつつ、剛へと向き直った彼は…

「だが、やるべき事ははつきりとした。剛……『神代』について調べてきてくれ。俺は『姫野』について調べる。」

「えっ、それってまさか!?!」

成る程、どうやら彼は…

「この二人……唯の一般人だと思おうか?」

—————

美琴 side

【出発します〜♪】

ん?…何、この声?

というか…

(ここ、どこ)?しかも、声が…)

喋れている筈なのに、声が全く聞こえない。

(これ、何かの列?それに、よく見たら…)

…電車の中?

…えつ、何で?

私って確か菊川警察署に居た筈…

【次は活け作り〜活け作り〜♪】

そんな事を告げる呑気な声が聞こえたと思つた瞬間、目の前で…

(…えつ!?!う、嘘…)

目の前で、ピエロの様な奴に人の身体が解体されていく。

丁寧に、丁寧に切り裂かれ、少しずつ、少しずつ部位を取り除いてミンチにしていく。

(うつ、うええ…)

思わず、吐きそうになってしまう。



## 第23話 悪夢は続くよ、どこまでも

### 第23話

「……はあ……はあ……」

息を切らしながらも、私は目を覚ます。

よ、良かった！起きれた！

で、でも……

「……酷い夢。」

あんな夢を見たせいで眠れなくなった為、私は寝かせて貰っていた部屋を出る。すると、暗い廊下の中で一つだけ灯りが着いている部屋が見える。

そこへ行くと……

「ん？どうした？眠れないのか？」

……そこには氷室さんが居た。

そして、一番離れた所にある椅子で八幡さんが眠っている。

「……少し嫌な夢を見てしまった。」

もう二度と、あんな悪夢は見たくない。

身体を切り刻まれ、ミンチにされるのなんて夢の中でもゴメンだよお…

「そうか…まあ、無理もないか。…何か飲むか？この警察署にある奴なら何でも奢るぞ？」

と、言ってくれる。

ありがたいけど、今はそんな気分でもないし、喉は渴いていない。

「…いえ、大丈夫です。それよりも…」

…少し、気になる事がある。

「…他の皆さんは？」

「少し調べ物があつてな。今回の怪異について、何か手掛かりになればと思つてね。」

だから、他の人が居ないのか。

でも、八幡さんはそういう事しないのか…

少し意外…

「ん？どこを見て…ああ、八幡か。ソイツも寝不足だったから、七望が無理に眠らせたんだよ。」

「ああ、それで…」

あんな感じで、無防備に寝てたのか…

それにしても…

『無防備に寝てる八幡さん、何かめっちゃ可愛く見える!』

男子なのに、あの可愛さは卑怯だと思う。ピコピコと動くアホ毛とか特に…

あれが巷に聞く『卑しかな男ばい』という奴なのだろうか?

由佳がこの場に居れば、詳しい事を色々聞けたのになあ…

「ん?…まあ、もう何も心配する事はない。君だつて寝不足なんだろう?今日はゆっくり休みなさい。明日からは忙しいなる。今の内に休んでおかないと、体を壊すぞ。」

「……はい。」

そう言われて、私はベッドがある部屋へと戻る。

中に入り、再び眠りに着く。

今度は、悪夢を見ないように祈りながら…

—————

【出発します〜♪】

…まさか!

(…そんな!また、この夢!?)

祈りは届かず、再びあの悪夢の電車へと呼び戻される。

【次は決り出し〜決り出し〜♪】

そ、それは前の夢で言ってた…

そんな事を思っていると、前回と同じ様に前の人がピエロへと向かっていく。

(い、嫌……止めて……)

前の人はまず、ピエロに両目を刃物で丁寧に抉り出されていく。

次に腹を裂かれ、中の臓器を次から次へと解体するみたいに抉りだされていく。

そして、終わったと思った瞬間……

【次は挽肉……挽肉……♪】

と、ピエロが告げる。

それと同時に、私の身体が勝手にピエロ達の元へと進んでいき……

(お願い、早く覚めて！私、挽肉なんかになりたくない！)

覚めて、覚めて、覚めて、覚めて！さめてさめてさめてさめてさめてさめてさめてサ

めてさめてさめてサメテサメテサメテサメテサメテサメテサメ……

続く

## 第24話 猿夢

### 第24話

「はあはあ……また……あの夢？」

あの悪夢から覚めた私は、慌てて氷室さんの元へと向かう。

「……氷室さん!!」

「どうした!?何かあったか!？」

そんな私に、氷室さんは驚いた表情を見せる。

その顔を見て、私は冷静さを少し取り戻した。

人の慌ててる顔を見ると落ち着けるって本当だったんだなあ……

「あの……その……また、嫌な夢を見てしまった……」

「……そうか。」

と、氷室さんは安心した表情を見せる。

……どうしよう？

もう、このまま一人の部屋で寝るのが怖い。

……そうだ!

「……あの……ここに居ても良いですか？」

「俺は構わないが……君自身、相当疲れが溜まっているだろう？今は無理にでも休んだ方が良いぞ。」

「はい……でも……」

眠るのが怖い。

また、あの悪夢を見る様な気がして……

「一人で眠れないのなら、そのソファで寝たらどうだ？」

と、氷室さんが提案してくる。

普通なら断ってたかもしれない。

でも、今はひたすら怖かった。

一人で居る事も、眠る事も……

「……………そうですね。」

そう答えるしか無かった。

眠るのが怖くても、眠気は執拗に私を襲う。

今も、眠くて立っているのがやつとだ。

「酷な事を言うが、君にはしつかりしてもらわないと困るんだ。……怪異の奴等は、人間の消耗した精神に容赦なく入り込むウイルスみたいな物だ。そうなったら、もう他人には

手を付けられん。まず君は、立ち向かえるだけの精神力を取り戻す事が大切なんだよ。」  
と、優しく私を諭してくれる。

「…分かりました。おやすみなさい、氷室さん…」

「ああ。また、明日な。」

と、私はソファーに寝転ぶ。

そして、寝ようとした時…

「あつ、そうだ。電気は消した方が良いか?」

いえ、大丈夫です…

—————

【出発します〜♪】

う、嘘!そ、そんな…何で!?

【次は挽肉〜挽肉です〜♪】

残酷にも、私への死刑宣告が響き渡る。

(は、早く逃げなきゃ!早く、早く!)

だが、意思に反して身体は動かない。

刻々と、私の身体は勝手にピエロへと近づいていく。

そして、完全に私を挽肉にする為の凶器が届く場所まで来てしまい…



色んなボタンを押すと、そんなアナウンスが流れてくる。

そ、そんな…

今、真逆に居るのに…

【うふふ、残念でした〜♪ここであ・な・たは〜挽肉DEATH〜♪】

(い、嫌あ！)

(残念ながら、ミンチにされるのお前の方だ。クソピエロ！)

ピエロが私に襲いかかった瞬間、私達以外の声が電車内に響き渡る。

そして…

【ぎゃふん〜!?!】

(思ったより、他愛ないな…)

その声、その姿…

何でここに居るかは解らない。でも、でも…

(八幡さん！)

(また怪異に襲われてるな、姫野。お前は怪異サーの姫か何かか?)

…また、八幡さんが私を助けてくれた。

まるで、白馬の王子様の様に…

続く

## 第25話 起きたら隣に年下女子が居た件

## 第25話

八幡side

夢を見ていた。

とても懐かしくて、もう二度と手に入れる事が叶わない日々を見ていた。

(ああ、懐かしい…)

ずっと溺れていた。

この偽りの幸せの中に、ずっと…

しかし、それをぶち壊すKYが現れる。

【ふふ、懐かしいねゴミいちゃん♪】

(お前か…)

アイツが、俺の夢の中に現れる。

何でもアリか、お前…

【あれ？殺気が弱いよ？どうしたの？ぼんぼん、痛い？それとも、お腹空いちやったの？】

(……………)

殺したい、さっさと殺してやりたい。

だが、ここは夢の中。普段とは勝手が違うのだ。

普段の力の1/3も出せば良い方だろう…

【あれあれ？もしかして、私に発情しちやっただ？良いよ、ゴミいちゃんなら…】

(ああ？)

気味が悪い！気色が悪い！気持ちが悪い！

頭痛も吐き気までする。

その顔、その声でそんな台詞をほざくな！

【やっぱり、ゴミいちゃんて遊ぶの楽しいね♪】

(はあ、さっさと目を覚ませよう…)

コイツと会話できてるという事は、この夢は明晰夢となっている筈だ。

なら、念じれば直ぐに目覚めれるだろう。

【あれ？起きようとしてる？ダメだよ、起きたらあの鬱陶しいメスが死んじゃうよ？】

(メス？……まさか、姫野か!?)

【ピンポン！大正解！】

コイツ、まさか関係の無い姫野まで…

【違うよ、別の奴だよ。私、ゴミいちちゃんを誘惑するメスなんて、大嫌いなもの。でも、今ここで死んでもらっても困るんだよね。】

(ナチュラルに心を読むな！それに、どういう意味だ！)

【ナイシヨ♪秘密が女を女にするんだよ、ゴミいちちゃん♪じゃあ、頑張つて！】  
その瞬間、俺は強い力によって、どんどん引き込まれていく。

(はっ!?ちっ、何をしやがった！)

【着いたら解るよ、じゃあね♪】

そして…

—————

…そして、現在へと至る。

まさか、他人の夢の中に飛ばされるとは…

本当に何を考えてるんだ？

(大丈夫か、姫野?)

(は、はい！ありがとうございます、八幡さん！)

(なら、良い。しかし…)

さて、どうした物か…

さっきブツ飛ばした奴も倒せた訳じゃない。

自分の夢ですら全力を出せないのだ。他人の夢の中なら尚更だ。

早くしないと、立ち上がってくるだろう。

(姫野、俺がここに来るまでに何かあったか?)

(えつと……このボタンを適当に押して先頭車両のロックを解除しました!)

(そうか……なら、早くそこへ行くぞ。)

と、彼女の手を取って走り出す。

(えつ、えつ?)

(くつ、やっぱり普段より力が出せない。)

やはり、勝手が違うな……

……慣れるのに時間がかかりそうだ。

(よし、着いた!)

(はあはあ、手を握るなら言ってから握ってください!)

(ああ、すまん。)

すっかり忘れていた。

無用に疲れさせちまったか?

(さて……)丁寧な緊急停止ボタンがあるな。)

少し周りを警戒しながら、そのボタンを押す。

それと同時に視界が暗転し…

（うっ、ここは…）

視界に光が戻ったと思ったら、見慣れた天井が見えてくる。  
しかも、いつの間にかベッドに居る。

等さんかクソ兄貴が運んで…

（知ってる天井だ…）

（…だな。って…）

（えっ?）

…隣をおそるおそる振り向くと、そこには姫野が居た。

えっ? 同じベッドに男女が…えっ?

えつと…マジで…えっ?

（きゃあ!）

（ぶべっ!!）

あつ、川の向こう側で親父達が…

続く

## 第26話 撲殺天使 美琴ちゃん

### 第26話

(ごめんなさい！本当にごめんなさい！)

(い、いや大丈夫だ…)

…嘘である。

実はかなり効いた。

女子の平手打ちって、こんなにも威力凄いのか…

(…あの、八幡さん…)

(ん？何だ、姫野？)

(ここ、本当に菊川警察署ですよね？)

…何だ、お前も気が付いてたのか。

(…違うな。おそらく、まだ夢の中だ。あの怪異が作り出した悪夢のな…)

(やっぱり…)

まず、違和感が凄いのだ。

この悪夢は、ほぼ完璧にあの警察署を真似ていると言っていていいだろう。

だからこそ、何処か嘘臭さが滲み出ている。

(…少し周りを警戒しながら探索するぞ。)

(は、はい！)

俺達は偽物の警察署を探索し始める。

やはり、そつくりだ。

だが、人の気配が全くしない。

それ所か、それらしき臭いも音もしない。

(…一応、出口に行ってみるか。)

この警察署の出口へと向かってみる。

まあ、おそらくだが…

(そ、そんな…)

(やっぱり居たか…)

出口にはピエロが待ち構えていた。

あれを倒さなきゃ出れないって事だろう。

だが…

(戻るぞ、姫野。ここは唯のブラフだ。)

(え？)

(しれっと、見えない壁張ってやがる。おそらく、あれは偽の出口だ。)

全く、変な手間をかける奴等だ。

(じゃあ、出口は別にあるって事ですか?)

(おそらくな。例えば、そこにある扉とかな。)

この警察署で見覚えのない扉が、出口の近くに存在していた。

そこには、何かをハメる様な窪みがある。

全く、ゼルダの伝説じゃあるまいし…

(まあ、どちらにしろ開けれそうにない。本当にどうした物か…)

探索するにしても、二階や三階、地下一階まであるのだ。

何処から手を着けた物か…

(あの…私達が居た部屋にでも行ってみます?)

(当てもヒントも無いし、行ってみるか。)

—————

俺達は談話室へと辿り着く。

まあ、談話室と言っても特務課の人か関係者しか使っていない場所だが…

さてはて、鬼が出るか蛇が出るか…

(やあ、待っていたよ美琴くん。イレギュラーのクソ野郎。)

(…ひ、氷室さん?)

(物凄く嫌われてるな、俺…)

まあ、等さんが俺の事をそう呼ぶ事はない。

間違いないく、コイツは偽物だろう。

そして…

(紹介したい人達が居るんだ。)

偽等さんがそう言った瞬間、あのピエロ達が壁を突き破って現れる。

(彼等は……殺人鬼だ。)

【挽肉く挽肉く隣のクズ肉はゴミ箱行きくゴミ箱行きく♪】

何でさつきから俺にヘイト高いの、コイツら？

まあ、良い。今は……

(逃げるぞ、姫野!)

(は、はい、八幡さん!)

……じゃ戦いにくい、一旦戦い易い場所へ…

【無駄く♪無駄く♪】

【挟み撃ちく♪挟み撃ちく♪】

しかし、逃げた方向の前からピエロが現れる。

前門のピエロ、後門のピエロか…

面倒だが、やるしか…

(も、もう…)

(ひ、姫野?)

(もう、嫌!)

(ひ、姫野!?)

姫野が震え出したと思った瞬間、近くに在った電話機を持ち上げる。

そして、ピーと鳴る電話機を全力で降り投げて…

(えっと、その…:ピーという発信音の後に遺言をどうぞ。)

【えっく?えっとく人肉万歳く♪】

ノリが良いのか、姫野に電話機を投げられたピエロはそう言い残して沈む。

…まあ、御愁傷様。

なら、後は…

【びつくりしたあく♪でも、僕は油断したりしないよ♪】

(いや、しようがしまいが無駄だ。俺が勝つ事には変わりないからな。)

後ろから来ていたピエロのナイフを避け、腹部に渾身の蹴りを喰らわせる。

【く、クズ肉めえ。な、何でそんなに強…】

と、恨み節を呟きながら、沈んでいく。

(ふう、よくやった姫野。ラリッククマの時も思ったが、肝が強いな！)

(…へ？えっ、その、ありがとうございませう？)

何その反応…

もしかして、自覚無しなのかコイツ？

(ぼ、撲殺天使…)

(へっ、天使？)

(いや、何でもない…)

思わず、そんな言葉が出てくる八幡であった。

続く

## 第27話 悪夢は次のステージへ

### 第27話

(さ、さて、どうしようか？ 結局、疲れただけで何の収穫も無いし…)

(…あの、八幡さん。そこに倒れてるピエロが何か持ってますよ。)

(え？…本当だ。これは…)

よく見ると、金と銀、胴の卵？を持っている。

もしかして…

(よし、少し試してみるか…)

この卵を拾い、あの変な窪みがあつた扉へとハメてみる。

すると、ぴつたりと卵達はハメる事ができ…

(開いちゃったよ…)

(あはは…)

少し、呆れてしまう。

いや、あんな雑兵にこんな物を持たせるなよ！

姫野なんかどう答えて良いか解らず、物凄い苦笑いになつてるんだぞ！

管理、ザル過ぎるだろ…

(…行くか。)

(…ですぬ。)

俺達は扉を開け、中へと入っていく。

さて、どうなる？

—————

(…成る程、まだ帰す気はないらしい。)

(えっ、また…)

中へと入った瞬間、再びあの電車の中へと切り替わる。

そんな中、アナウンスが流れ始める。

【しぶといですぬ〜早く死んでください〜♪】

腹立つなこの声…

(しぶといも何も、お前らが雑魚過ぎるんだよ。大事な物の管理もザルだし、アホなのか？)

【黙れ、クズ肉。お前に答える価値など皆無だ。お前はそこの挽肉候補よりも先に死ね。地獄に落ちろ、腐りに腐った毒物が。】

(コイツ、キャラ捨てて素で答えてやがる…)

俺に対してのヘイトが異様に高すぎる。

一体俺が何を……色々してますね、はい。

まあ、それ以外にも理由はあるんだろうが……

(まあ、仕方ないか。それよりも……)

(……八幡さん?)

(隠れてないで、さっさと来いよ殺人鬼!)

「そこそと隠れていたピエロに向かって、俺は渾身の蹴りを放つ。

【びぎやつ!クソが、死ね!死ねよ、クズに……】

(きやつ!)

(ちつ、やりすぎたか?)

俺の蹴りによって吹っ飛んだ奴は、窓を突き破って外へと放り出される。

そして、『グチャ!』という不快で潰れる様な音が響き渡り……

(轢かれたか……。ん?ボタンを押してないのに電車が止まって……)

(ま、また、何か……)

次のピエロを警戒していると、またアナウンスが響き渡る。

【人殺し♪人殺し♪】

(酷いブーメランだな。おい……)

(それはこっちの台詞だよ…)

全く、呆れた奴等だ。

面の皮が厚いのに程があるだろうに…

【黙れ、クズ。…人身事故が発生しました。緊急停止させていただきます。文句はそのクズに言ってくださいね♪】

(あの野郎…)

遂に肉まで着けなくなったぞ、あの殺人鬼！

隠す気がないの、清々しくて逆に尊敬するわ！

(…本当に何なの?)

(…全くだ。)

はあ、本当に色々面倒な奴等だ…

続く

## 第28話 事案

### 第28話

一方、その頃…

現実世界での談話室では…

「…よう！お勤めご苦労様！」

「…お前か、剛。」

「調べ物のついでにコンビニ寄ってきたぜ。ほらよ、差し入れた。」

「ふっ…悪いな。」

と、剛がコンビニで買ってきたであろうおにぎりや飲み物を渡してくる。

全く、こういう時だけ気が効くんだな…

「等、美琴ちゃんの様子はどうか？」

「見ての通りぐっすり眠っている。さつきまで寝付けなかったみたいだが…ひとまず一時休戦といったところだ。」

「そいつあ良かった。」

全くだ。

明日から、かなり忙しくなるだろうからな。

その為にも、彼女自身の為にもゆっくり休んで欲しい物だ。

「……お前の方はどうだ？あれから何か進展はあったか？」

「……ああ、七割つとこだな。翔太の言う通り、どうやら今回はとんでもねえ怪異が関わってるかもしれないぜ。」

「……ほう。それは是非聞かせてもらいたい物だ。」

どうやら、かなりの収穫を得た様だ。

果たして、どんな怪異が潜んでいるのやら……

そんな事を思っていると……

「……………おい、等。」

「……………どうした、剛？」

「……………美琴ちゃんの様子が変だ。」

「……………何!？」

そう言われ、急いで美琴くんの様子を見る。

確かにうなされていて、苦しそうにしている。

「……おい、起きろ！起きるんだ、美琴くん！」

力強く揺するが、全く反応しない。

「駄目だ、起きない……」

「一体どうなってるんだ？こんなにも苦しそうにしてるつてのによ……」

ふと、嫌な予感が過る。

まさか……

「怪異、か……」

「はあ!?!さつき遭ったばかりじゃねえか!こんなにも連続して続くもんなのかよ!?!」

普通なら有り得ない。

だが、今現実には彼女は何かの怪異に襲われている。

「……取り敢えず、病院へ連れて行こう。何もしないよりはマシな筈だ。」

「無意味だな……」

剛の言葉を、入ってきた翔太が否定する。

「翔太!?!でも……」

「お前も知ってる筈だろ、現代医学がどれだけ怪異に対して無意味なのかを。」

「それは……」

それを聞いて、剛は黙り込む。

俺達はそれを身をもって知っているからだ。

「等、彼女がこうなる前に何か変な事は起きてなかったか?」

「…そういえば、眠れないと言っていたな。」

「成る程、そういう事か…」

流石は翔太、何か掴んだな。

「人は睡眠状態になると無防備になる。五感が低下し、敵に襲われる確率が高くなる訳だ。それは勿論、怪異相手も例外じゃない。」

「…つまり、美琴ちゃんは今、寝込みを襲われているって事かよ!？」

おい、剛。

言いたい事は解るが、その言い方はないだろ…

「…ま、まあ、言い方はアレだが、おそろくね。怪異って奴は、いつ如何なる時でも手段を選ばず襲ってくる物だ。それに、闇や夜は奴等の領域、特権だ。一度引きずり込まれれば、脱出するのは困難だぞ。」

確かにその通りだ。

それはよく身に染みている。

だが…

「…それでも、何もしない訳にはいかない。翔太、アレを使うぞ。」

「全く…手遅れでなければ良いが…。」

夢の中だけでなく、現実世界でも戦いが始まる。

果たして、悪夢は覚めるのだろうか？  
続く

## 第29話　ここは地獄（笑）　素敵な地獄（笑）

## 第29話

そして、舞台は悪夢へと戻る。

（…止まったし、降りてみるか。）

（そうですね…）

電車を降りてみると、一寸先は闇ばかりだった。

見える物は電車と線路。

いや、他にも変な建物と看板も見えるな。

何だ、アレ…

（何々…『地獄 → 『？）

（どうしよう、何となくそうじゃないだろう感が凄いよ…）

姫野の言う通りだ。

どうせ、あのピエロ達の事だ。

雑でザルな地獄（笑）だろう…

（何も無いし、入るか…）

（ですね…）

渋々中に入った瞬間、扉が音を立てて消失する。

まあ、典型的な畏だな。

むしろ、警察署の時よりゼルダ感が増してるまでである。

（さて、どうした物か…）

探索をし始めるが、何も良い物は見つからない。

だが、少しでも違和感を感じる。

というより、既視感か…

（あの…八幡さん…）

（何だ、姫野？）

（私、ここを何処かで見た事がある気がするんですよ。）

（奇遇だな、俺もだ。）

そうなんだよ、昔こんな所を…

そんな事を考えながら、開いている部屋へと入る。

そこには本が沢山あり、まるで書庫みたいだった。

（ん？この本…）

とある本を手取る。

変哲もない赤色の本だが、重みを全く感じない。

それ所か、中から変な音が…

(…もしかして！)

その本を開けると、中には『異界の鍵』と『冥界の鍵』と刻まれた二つの鍵があった。  
(成る程、そういう事か…)

(八幡さん！私、この本に書いてあるモンスター見た事あります！)

(何？…俺もだ。)

やっと既視感を感じる理由が解った。

この建物、昔やった事のあるゲームの奴と似ているんだ！

(姫野、お前もやった事あるのか？あのドラクエ擬きみたいなゲーム？)

(はい！ドラクエっぽいと思っただけど、かなり楽しいゲームでしたよね！)

(ああ。昔、七望兄さんとどっちが先に全クリするか勝負した物だ。)

クラスの奴等に嬉々としてこのゲームの事を話そうとしたら、誰も知らなかったけど  
な！

…やめよう。傷が開くだけだな…

(つまり、この建物を攻略するには…)

(…あのゲーム通りにやれば良い！)

こうして、俺達はこの建物を楽々と攻略した。

その中には異界（笑）や冥界（笑）な場所もあったが、攻略するのは簡単だった。その途中…

（ボールに乗りながら、何で跳ねられるんだ？）

（スライムナイトみたい…）

【残念だけどメタルライダーだよ〜♪】

（そっちかよ！色合いは似てるが…）

【黙れ、クズ。お前の声は耳障りだ。】

みたいなやり取りがあったり…

（ここ、色々と鈍器多いですね。）

（やはり、撲殺天使か…）

（へっ、天使!?!）

（いや、何でもない。…でも、ここにある刀は持っていくか。）

…みたいな事もあった。

そして…

（ふう、この魔方陣に乗ればラスボスだな。）

(…ですね。)

(…あのピエロの相手は任せろ。姫野、お前はスイッチの方を頼む。)

(はい！)

俺達は、魔方陣を踏む。

その向こうに居るラスボスと決着を着ける為に。

続く

## 第30話 ここから先は…

### 第30話

魔方阵を踏んだ瞬間、周りが炎で囲まれた部屋へとワープさせられる。

ここはラスボスと最終決戦場。

おそらく、流石に、多分、ここで力を抜く程に、奴等はバカでもザルでもないだろう

…

【よく来たね〜挽肉ちゃん♪】

(おい、俺は…)

【さあ、最後の勝負を始めようかあ〜♪】

(遂に無視し始めたよ、コイツ…)

王冠を被ったピエロが戦いの開始を宣言する。

さて、こちらから始めるか！

(姫野、さつき言った通りスイツチを頼むぞ！)

(はい！八幡さんもよろしくお願いします！)

(はっ、当然だ！)

【ちつ、そう来るかあ。全く、邪魔だなあ。僕は早くあの娘を挽肉にしたいんだけど？】

と、ピエロは偉そうにほざいてくる。

はあ？何を言っているんだ、コイツ？

そんなの…

(させる訳ないだろ、殺人鬼。)

【はあ、だよねえ。でも、ちようどいいや。君から漂う腐敗臭を消したいと思つてた所だ。】

(はっ、やってみろ！但し、覚悟しておけ…)

まあ、細かい事を言つと、ここは姫野の夢の中だから間違いな気もするが…

(…ここから先は、独壇場だ。)

【厨二病は恥ずかしいぞ！】

(なら、七望兄さんは恥ずかしい人間だな。可哀想に、怪異にまで侮辱されるとは…)

【誰だよ、それは！】

だって、この台詞作つたの七望兄さんだし…

だから、俺は悪くない。こんなカッコいい台詞を作るクソ兄貴が悪い。

—————

(はあはあ、暑い。)

夢なのに暑い。

ゲーム内でもそういう場所だったけど、そういう所まで再現してるのね…

(でも、後1つ…)

しかし、現実夢はそう上手くいかないらしい。

【ふふ、残念でしたあ〜♪伏兵登場〜♪】

(そんな、後もう1つで最後のギミックが発動させれるのに…)

私の前に、新たなピエロが現れる。

しかも、器用にボールでピョンピョン跳ねるメタルライダーの奴だ。

でも、諦めちゃ駄目だ！

私は八幡さんに任されたのだから…

(一旦逃げて…)

【おつ、諦めないの〜？良いね〜♪でも、無駄な足掻きだよ〜♪】

(残念、それはお前らだ。)

逃げて距離を離そうとした瞬間、八幡さんの声が響き渡る。

その瞬間…

【がっ、くっ、クソがあ…】

ピエロの頭に、あの王様っぽい奴が持ってたナイフが突き刺さる。  
(す、凄い…)

って、肝心してる場合じゃない！

早くスイツチを押さないと！

—————

【クズ肉め！俺の愛用ナイフを奪った挙げ句、それを同胞殺しに使うとは！】

(はっ、簡単に奪われるお前が悪い。それに姫野と約束したからな。)

『ピエロの相手は任せろ』ってな…

(それに、もうお前はチエツクメイトだ。)

【はあ？ぐっ、身体が…お、重い…】

(八幡さん、全部押ししました！後は、ソイツを奈落に叩き落とすだけです！)

(だ、そうだぜ？)

全く、お前達はゲームを真似るべきじゃなかった。

ギミックだけじゃない、ラスボスを演じるお前でさえも役に縛られる。

【く、くそがあ…】

(はは、残念だったな。…じゃ、落ちよつか♪)

重くなって動けなくなったピエロを引きずり、奈落へと突き落とす。

全く、一応刀を持ってきたのは良いが、あんまり活躍させれなかったな…

(や、やったあ！)

(ああ、ゲームクリアだ。)

お互いにハイタッチを交わす。

さて、次はどうなるか…

続く

## 第31話 『猿夢』という悪夢の終結　そして次の怪異は

：

## 第31話

この建物はクリアした。

だが：

「また、ここ……」

「全く、どうしても帰す気がないらしい……」

再び、あの電車内へ戻される。

しかも、また動き出している様だ。

【大変長らくお待たせ致しました♪次は挽肉♪挽肉です♪♪】

と、不快なアナウンスが響き渡る。

どれだけハンバーグに拘る気だ、コイツら？

アマゾンズでもそこまで執着してないぞ？

【皆様に♪ご連絡致します♪。ただ今、列車内の肉が激しく抵抗している為♪見つけ次第、ぶち殺して頂くよう♪ご協力をお願い申し上げます♪。後、クズ肉も紛れ込んでいます

ので、そのゴミも地獄に落としてくれたら助かります。」

「ふ、ふざけないで！誰が挽肉よ！」

「全くだ。最後の最後まで、高いヘイト向け続けやがって…」

まあ、でも…

【お肉くくお肉くくそろそろ死にますか？】

「なっ！こ、この…」

「まあ、落ち着け姫野。」

「八幡さん!?で、でも…」

コイツは気が付いてないらしい。

全く、最後の最後までザルな奴だ。

まあ、『猿夢』だから当たり前なのか？

「なあ、『猿夢』。」

【あつ？お前に用はない。その臭い口なんか塞いで黙ってるよ。】

「まあ、聞け。」

これから話す事は…

【『夢』はいつか覚める物だ。むしろ、覚めるからこそ尊い物だと考える奴も居る…】

「八幡さん…」

…お前の敗因だ。

【それがどうした?】

「全く、気が付かないのか?こんなゴミみたいな悪夢は終わりだつて言ってるだ。」

『……そして、死ぬのもお前だ!』

この空間に居ない筈の人の声が響いた瞬間、景色が反転していき…

「はっ……、ここは……」

目に光が戻ると、直ぐに解った。

あ、明るい!そして、人の気配もする。

もしかして、ここは…

「……美琴くん!」

「……氷室さん?」

「気が付いたか…良かった、心配したんだぞ。」

本物だ!あの時の偽氷室さんじゃない!

戻れたんだ、夢の世界から、あの悪夢から……

「あ、あ、うわあああん……!」

「……うん、もう大丈夫だ。」

我慢できずに泣いてしまう。

…でも、ふと思った。

八幡さん、八幡さんは？

『はあはあ、何だ？あの道具は、あの武器は…』

何もかもが異常だ。

あの女の夢の中から引きずり出すだけじゃなく、この私にここまでの傷を負わせた！

人間が、人間ごときが、この私に！！

『私は、私こそは悪夢の支配人だぞ！あんな奴等に負ける筈など…』

「へえ、お前が支配人？チンケな支配人が居たものだな。」

『なっ、誰だ…っってお前はクズ肉!?!』

何で、お前がここに…

「やっつと、敗残兵に追い付けたと思ったら、聞くに耐えない負け惜しみを呟いてるとはな

…」

『何？な、ナメるなよクズ肉が!』

「いや、単純すぎるだろ…」

見えなかつた…

…そして、抵抗さえ許されなかった。

気が付いた瞬間、私の目線はズレ始め…

…少しずつ真つ暗になっていく。

「いやはや、良い物を貰った。まさか、夢で貰った刀まで着いてくるとは。」

ふざけるな！そんな事…

…そんな事あつてたまるか！

「まあ、いいや。じゃあな、『猿夢』。良い夢見ろよ？」

『ふ、ふざけ…』

もう言葉を放つ力すら残っていない。

ああ、死ぬ。死んでしまう。



## 幕間③

## 幕間 その5 名刀『鳳凰丸』

その5

「…よお、大丈夫だったか？」

「あつ、八幡さん！」

結局、私はあの後泣き疲れて眠ってしまった。

勿論、悪夢など見ずにぐっすり眠れた。

そして、ちょうど目を覚ました所に八幡さんがやって来た。

「…どうやら、大丈夫みたいだな。」

「はい！八幡さん達のお陰でぐっすり眠る事が出来ました！」

本当に感謝している。

特に八幡さんが居なければ、私は夢でハンバーグにされていただろう。

それにしても…

「あの、八幡さん…」

「何だ、姫野？」

「その持つてる刀、何ですか？」

「…やっぱり、見えるんだな。」

え、見えるんだなって…

「よく見ろ、この刀を…」

「えっ……………つて、これ！あのゲーム終盤も終盤でゲットできる名刀『鳳凰丸』じゃないですか！」

「……………ああ。」

名刀『鳳凰丸』

その名の通り、かなりの武器だ。

これを所持するだけでゲームバランスが壊れる位に強力な上に、これが出てくる確率がこれまた低いのだ。

…今なら解る。

何でRPGでギャルゲーをしなければならなかったのだろうか？

「で、何で持つてるんですか？」

「解らん。目が覚めたら持つてた…」

ええ…何それ……………

「でも、懐かしいですね。これを手に入れるの本当に苦労しましたよ。」

「全くだ。本当に好感度あげるの難しくて…」

「そうなんですよ。あの仕様だけは今でも謎に満ちてますよ…」

「ああ。あの仕様のせいで、七望兄さんは絶望してたからな。あの人、ゲームですら悲惨な状況だったからな…」

こうして、私達はあのゲームの事を語り合った…

…氷室さんが朝食が出来たと呼びに来るまで。

しかし…

「何処か睨まれてる様な…」

「ん？どうした、姫野？」

「いえ、何でもありません。早く行きましょう！」

「わ、解った！解ったから、押すな！」

—————  
我が名は名刀『鳳凰丸』

何故か最近意思を持ち、新たな主人を得た者だ。

『これが、私の主人…』

主人は目が腐っていた。

それだけじゃない。少しキツイが、病み付きになりそうな臭いと気配をしていた。

それ所か、安心感まで覚えてしまう。

『何故だ、何故なのだ？』

そんな事を考えていると、ふと別の奴が目に入ってくる。

『これは…人間の雌？』

一応、知識にはある。

アレだ、主人の逆な存在だ。

だが…

『主人と話している姿を見てみると、謎の感情が湧き出てくる…』

この感情は一体…

解らない。理解できない…

…だが、一つだけ解った事がある。

『我、コイツ、嫌い。』

何故か、そう思うのであった。

この後、リストができる位に嫌いな存在が増えるとは知らずに…  
続く

## その6 人物・怪異紹介（第3章版）

その6

登場人物紹介

①霧崎 翔太

七望が通う大学で講師を勤める民俗学の教授。

よくその知識を頼りに、特務課から協力要請を受けている。

七望と共に怪異を追い出したり、引きずり出す為の装置を作った。

だが、それが別の怪異事件の引き金になる事を彼は知らない。

最近をよく七望と怪異について語り合っており、そのせいか彼に牽かれる人達は話しかける事が出来ずにいる。

しかも、本人はそれに気が付かず、ヘイトは七望の方に向かうというオマケ付き。

—————

登場怪異紹介

①猿夢

悪夢の支配人。

弱った心の隙を突き、人間を悪夢へと引きずり込む。

人肉は好きだが、それよりもその時に感じる恐怖が好物。

最近、絶望する人間を眺めながら血を啜るのがマイブームらしい。

八幡に対しては、嫌な臭い、嫌な気配、不粹な邪魔者という三拍子なので、とことん嫌っていた。

その理由は彼の過去も関係しているが、最後の邪魔者という点が、一番怒っている所。基本的に電車以外の光景はその夢の持ち主の記憶から作り出す、それが仇となる事も……

最後は悪夢を嘆きながら、地獄への特急列車に乗る事となった。

まあ、因果応報、自業自得である。

—————

その他

①ワイバーンクエスト

ドラゴンクエストのパクりみたいなRPG。

実際、既視感が満載な要素ばかりだが、やってみると中々面白い。

なので、隠れファンがかなり居るとか居ないとか。

基本的に世界を混沌に満ちた物に変えようとする魔王を倒す物語だが、途中途中でポ

ケモンみたいになったり、牧場物語みたいになったり、とある剣を手に入れる為につきめきメモリアルみたいなお事もしなければならぬ事もある。

挙げ句の果てには、ミニゲームでスマブラみたいな事も出来た。

…RPGとは？

## ②名刀『鳳凰丸』

別名『フェニックス・ストラッシュ』

ワイバーンクエストの終盤も終盤で手に入れる事が出来る刀。

彼女を手に入れる為には…

その1

序盤で出会う謎のヒロインSの好感度をちゃんとコツコツ上げ続ける。

その2

数々の選択肢を100%正解を選ぶ。(場所やその時の気分で正解は変わります)

その3

そして、他のヒロイン達を仲間から排除する。

その4

必要が無い限り、NPCも含めた女性キャラに話しかけない。

これらを乗り越える事で、彼女は仲間兼最強の武器となり、これを使えば魔王にも勝

てる位に強い装備を手に入れた事となる。

だが、これ以外を装備できなくなるし、防具とかの機能もなくなる。

それだけでなく、覚醒した後に必要が無い限り女性キャラと話しかけただけでバット  
エンディングとなる。

なので、ジャンルは呪いの装備側。

猿夢が再現した夢の中にもあったが、八幡が持つ力と力が再現された呪われた妖刀  
『鳳凰丸』が変な化学反応を起こし、夢を現にした。

つまり、八幡の自業自得。

本人にその気はなくてもね。武器に選んだ八幡が悪いんだよ。

霊感がある人にしか見えず、出し入れも出来る。

だが、1mも離れた瞬間、獣の槍みたいに飛んでくる。

現時点で、八幡最強の武器。

続く

第1部 第4章 やはり、俺の青春ラブコメは間違つて  
いる

第32話 久しぶりの学校

第32話

八幡 side

『猿夢』を倒してから数日…

姫野は再び学校へ通える事となった。

連続して襲ってきた怪異達も鳴りを潜め、全く現れなくなつた。

しかし、まだ油断はできない。

そのせいかな…

「…はあ。大丈夫なのか、これ？」

「何がですか、八幡さん？…つて、じゃなくて、八幡先輩？」

何がつて、お前…

「お前、俺なんかが監視者で良いのか？」

学年は違うとはいえ、通う学校は一緒。

という事で、監視者に任命されました。

俺は別に良いんだが、姫野の奴がどう思ってるかどうか…

「えっ？別に良いですよ、八幡さ…先輩ですし。知らない人に監視されるよりも、八幡先輩の方が私的にも良いですし。」

「マジか、お前…」

やはり、女という物はよく解らん。

しかも、ヤケに嬉しそうだし…

…流石に自意識過剰、か。

—————

美琴 side

あつという間に時間は過ぎていき、昼休憩の時間となった。

「八幡さん、まだかなあ…」

今日からは監視を含めて、八幡さんと昼食を食べる事となった。

何故だろう、少し嬉しい…

「でも、良かったのかな？」

最初は私が八幡さんの教室に行くつもりだった。

でも…

『入ってきたばかりの一年にそんな勇気のいる事をさせられるか。』

って、逆に迎えに来てもらう事になっちゃった。

「美琴ちゃん、今日一緒に昼食食べない？」

私が八幡さんを待っていると、友達のいろはちゃんが話しかけてきた。

「あつ、いろはちゃん！ごめんね、今日は先約があるの。また、今度一緒に食べようね！」

「そうなんだ…うん、また今度ね♪」

私が断ると、少し悲しそうな顔してたな。

罪悪感が沸いちゃうけど、仕方ない。

そんな事を思っていると…

「ねえ、姫野さん！一緒に昼食食べない？」

間髪入れず、クラスメイトの男子が誘いに来る。

確か、えつと、多分…

「……ああ、Aくんだっけ？ごめんね、今日は無理。先約が居るの。」

「先約？なら、何で何処にも行かないんだ？」

「えっ？待ってるからだけど…」

別に関係ない筈なのに、何で聞いてくるんだろう？

「それらしい奴なんて、全く来てないじゃん！そんな君を待たせる奴よりも、俺達と一緒に食べようよ！」

…はあ？何を言ってるのだろう？

先約を破るつもりはないし、この男子達と食べる意義が見いだせないし…

「ねえ、良いだろ？」

「普通に嫌ですけど…」

「えっ？」

「えっ？」

話が噛み合わない。

一昨日の、『猿夢』の方がまだ会話できる気がするなあ…

そんな事を思っていると、周囲がザワザワし始める。

もしかして、八幡さん！

そう思ったのだが…

「姫野 美琴さんだったかしら？この名前の生徒は居るかしら？」

そこには、私と同じ黒髪ロングの女子が立っていた。

うわあ、綺麗…

「あ、あの、私ですが…」

「そう、貴方が…。あの男、やはり黒髪ロングが好きなのかしら（ボソツ）…」

最後の方は聞こえなかったが、色々と私をジロジロと見た上に、勝手に納得している。

何、この人…

「あの…何の用ですか？」

「ああ、そうだったわね。比企谷くんの代わりに貴方を迎えに来たの。」

「えっ、八幡さんの代わりにですか？」

「八幡…さん…?？」

「はい？」

その瞬間、空気が凍った気がした。

そして、冷たく青い焔がこの人から出ている様に錯覚してしまう。

まるで、零度の焔だ。

「…ふふ、そう。…そういうえば、自己紹介がまだだったわね。私は…雪ノ下雪乃。」

この人…雪乃先輩は凍る様な笑みを浮かべ…

「唯一無二の、比企谷くんの友達よ♪」

まるで、宣戦布告するかの様にそう言った。

何故だろうか…

…無性に腹が立つなあ。

続  
く

## 第33話 氷の女王と撲殺天使

## 第33話

「……………」

私達は無言で見詰め合う。

周りが何故か騒がしいが、そんな事はどうだっていい。

目を逸らしたら……私の負けだ……

何故か、そう確信していた。

「あ、あの……姫野さん……」

「……Aくん、邪魔。私は君と一緒に食べる気はないの。早くどこか行って。」

「あら、不粋な人も居るものね。貴方がこの場の邪魔者でしかないのが解らないかしら

？」

「……………すみませんでした。」

と、Aくんは何故かトボトボと下がっていく。

やっと、煩いのが消えたよ。

さてと……

「……こじや面倒ね。…着いてきなさい。」

「…はい。私も、色々と聞きたい事があるので…」

「奇遇ね、私もよ…」

-----  
残された教室では…

「何あれ、雪ノ下先輩だっけ？少し聞いてたのより怖いけど、それ以上に綺麗…」

「惚れた…」

「止めとけ、身の程知らず。」

などの声や…

「A、ドンマイ…」

「ちくしよう、ちくしよう…」

「何でコイツはモテるのに、本命にはこうなるんだらうな、C？」

「言ってやるな、B…」

とのやり取りがあつたとか…

-----  
「…すまん、待たせた。つて………」

平塚先生に捕まったせいで、色々と遅れたが何とか部室に来れた。

しかし、そこには…

「この紅茶美味しいですね、雪乃先輩。」

「そう、それは良かったわ。個人的にはぶぶ漬けを食べさせてあげたかったのだけど…」

「へえ、そうなんですか。是非、今度食べさせてくださいね…」

何……………これ……………

怖い、超怖い！

よし、こういう時は…

「すみません、部屋を間違えました。」

『逃げる』、これが一番だ！

「あら？間違つてないわよ。それとも、どこに行くというのかしら、比企谷くん？」

「そうですよ、八幡先輩？まだ私達を放置する気なんですか？」

「…すみませんでした。」

謝る理由など無い筈なのに、俺は謝罪の言葉を発してしまう。

だって、コイツら超怖いもん！

下手したら、今までの怪異よりも怖いまである。

「さて、比企谷くん…」

「八幡先輩…」

「な、何だ、二人とも？か、顔が怖いぞ？」

ほら、スマイル！スマイル！

土曜の朝のウルトラマンもそう言ってるぞ？

「この娘とはどういった関係なのかしら、タラシ谷くん？」

「この先輩とはどういった関係なのか、八幡先輩？」

ヤバイ、めっちゃ怖い…

誰か、助けて…

『我を呼んだか、主人！』

そう思った瞬間、俺の中から『鳳凰丸』が飛び出てくる。

『さあ、女傑ども！主人に変わって我が相手してやろう！』

「『鳳凰丸』が喋ってる？」

「お前、喋れたのか…」

「……？二人は何を言っているの？」

助かったのは良いが…

…どうするつもりだ、コイツ？

続く

## 第34話 今はただ君に感謝を

## 第34話

取り敢えず、『鳳凰丸』のお陰でその場は何とかなつた。

おそらく、多分、maybe…

しかし、結局放課後にまた集まる事となつた。

いや、当分の間は部活休むつもりだったんだが…

「では、改めて。それぞれの事を話しましょう。良いわよね、タラシ谷くん？」

「構いませんよね、八幡先輩？」

『我も！我もやりたいぞ我が主人！』

「…うん、もう好きにして。」

諦めて、好きにやらせる事にした。

何か口挟んでも、死ぬ未来しか見えないし…

俺のサイドエフェクトもそう言ってるし…

「てか、何でお前まで参加してるんだ。」

ナチュラルに参加してたからスルーしたけど、普通に混じってやがる。

少し羨ましい。

そんなスキルあつたら、俺も小さい頃ハブられたりしなかったのだろうか？

『誰が主人に相応しいかを決める議論なのであろう？それなら、参加して当然だろう！』

「いや、そんな話してないだろ…」

確かに仲は良いと思いたいけど、そんな関係になる気は皆無だぞ、俺？

「ていうか、お前は雪ノ下とは喋れないだろ。」

あの後解つたのだが、雪ノ下は『鳳凰丸』の事が見えていないらしい。

しかも、声が聞こえない所か、触る事すら不可能だった。

何故か、その事を姫野は嬉しそうにして、雪ノ下は悔しそうにしていたが。

「比企谷くん、もしかして、またその器物だけをかまっているのかしら？」

「……八幡先輩？」

「…その目、止めてくれませんか？」

雪ノ下の視線は凍りそうに怖いし、姫野に至っては光が消えかかっている。

でも、何か癖に……

「比企谷くん（八幡先輩）？」

はい、嘘です。

怖いから止めてください、何でもしますから！

「そう。では少し考えるところわ…」

「何頼もうかなあ…」

『我も！我も主人に何かしたい！』

ナチュラルに心を読むの止めてくれる？

ていうか、近い！近いから『鳳凰丸』！

柄の部分がさつきから当たってて、地味に痛いから！

—————

何が楽しいのか解らないが、女子三人は話し続けていた。

まあ、1つは女なのかどうか怪しいが…

しかし、珍しい物を見た。

基本的に、雪ノ下は寡黙だ。

アイツが饒舌になるのは、ネコがパンダのパンさん位だ。

それ以外であんな饒舌になるとは…

「姫野に感謝しないと…」

アイツの生き方は美しく、眩しい物だ。

俺とは真逆であり、だからこそ惹かれてしまう。

「…お役御免になるのも近いかな？」

そんな彼女にやっと俺以外の仲間ができた。

それは喜ばしき事であり、彼女の支えとなるだろう。

…いつか消えるかもしれない、俺と違って。

「あの…すみません…」

そんな事を考えていると、奉仕部のドアがノックされる。

マジか、本当に依頼人が来るとは…

「ふう、一旦中断ね。どうぞ…」

「し、失礼します。平塚先生に紹介されて来たんだけど…って、ヒツキー!? 何でここに居るの?」

ヒツキー…ヒツキー…

えっ、もしかして…

「ヒツキーって俺の事か?」

続く

## 第35話 由比ヶ浜 結衣

## 第35話

「えっ、ヒツキーはヒツキーだよ?」

と、さも当然の様に、目の前の女子は答える。

マジかよ…というか、誰だよコイツ。

俺の知り合いにこんな茶髪で、制服を着崩してる巨乳な今風の女子高生なんて居ないぞ?

「ヒツキー…ぷっ、ふふ…」

「雪ノ下!!」

「……おっほん、失礼したわ。貴方…由比ヶ浜 結衣さんね?」

「あ、あたしの事知ってるんだ…」

と、彼女は少し嬉しそうにする。

まあ、雪ノ下の奴に知られているという事は一種のステータスみたいな物なのだろう。

…知らんけど。

「よく知ってるな、お前。全校生徒の名前、全部把握してるんじゃないか？」

「凄いですね、雪乃先輩。まるで、何でも知ってるみたい。」

『我、あの女、何か嫌い。』

流石はユキペディア搭載の雪ノ下。

本当に何でも知ってそうでなのが凄い。

後、『鳳凰丸』。

お前の人間体（ゲーム内）が乳部・タイラーだからって、由比ヶ浜を僻むなよ。

「何でも知らないわ、知ってる事だけよ。それに私は…何でもないわ。」

と、雪ノ下が由比ヶ浜の一部を見て悲しそうな顔をする。

あつ、確かに違うよね。色々と…

「比企谷くん?」

「八幡先輩?」

『主人?』

おっと、何故バレた?

しかも、流れ弾が全方位に飛んで、俺に連鎖誘爆してるんですけど!

もう、女子の前で変な事を考えるのはやめよう…

「…何か、楽しそうな部活だね!」

「そう？確かに楽しい部活よ。少し邪…異ぶ…部外者が混じり始めたのが残念ではあるけれど…」

「お、おう。そ、そうか…」

俺を見て微笑むの止めてくれませんか？

可愛いし、可愛いせいで心臓がバクバクなんですけど！

でも、どこかトゲがある様な…

『鳳凰丸』ちゃん、あういうのが卑しい女なんだよ。』

『成る程、勉強になった！我、貴様だけは嫌いなのに、主人ほどではないが好きでもあるぞー！』

「聞こえてるわよ、姫野さん…」

またやってるよ、あの二人…

『喧嘩する程、仲が良い』とは言うが、程々にしておけよ。

「ヒツキー、ちゃんと喋れるんだ…」

「いや、そりゃ喋れるよ。」

俺、人間。口、ある。

ちゃんと喋れる、OK？

「だって、クラスだと全然喋らないし…」

「あら、そう言えば、同じクラスだったわね。」

「えっ、そうなの？」

…知らなかった。

ん？待てよ…確か、トップカーストの集まりに、こんな女子が居た様な…

「もしかして、知らなかったのかしら？」

「いや、し、知ってるよ？」

「じゃあ、何で目を逸らすし…。しかも、疑問系だったし…」

ちっ、目ざとい奴め！

「…はあ。そろそろ、ここに来た理由を聞いてもいいかしら？」

「あつ、そうだった。平塚先生に聞いたんだけど、ここってお願いを叶えてくれる所だよ  
ね？」

「それは違う。ここは魚を取ってあげるのではなく、魚の釣り方を教える場所だ。お前の  
願いが叶うかはお前自身にかかってくる。………だろ？」

「……ええ、そうね。どんな依頼かは解らないけれど、全力で貴方を手助けすると約束す  
るわ。私と、彼の二人でね！」

続く

## 第36話 地獄への道は『善意』で舗装されている

## 第36話

「な、なんか凄いな〜」

あつ、コイツはバカだ。アホの子だ。

だって、『ほえ〜』って感じのアホ面しちゃってるし。

大丈夫か、コイツ。

変な宗教に引つ掛かりそうだな…

「仲間ハズレ、反対。」

『反対！反対！』

「あら、ごめんなさいね。でも、部外者の貴方は関係無いもの。」

『『むう…』』

何あれ、ハムスター？

『鳳凰丸』は顔が無いからよく解らんが、姫野がやるとあざとく感じないのは何故なのだろうか？

まあ、アイツらはほっておいて…

「で、どんな依頼なんだ？」

「あ、あの、あのね…クツキーを…」

依頼内容を聞こうとすると、恥ずかしそうにチラチラと俺を見てくる。

成る程、そういう事か…

「雪ノ下、後は頼んだ。良ければ、姫野も手助けしてやってくれ。俺はマツ缶買ってくるから。」

「ええ、少し不満も有るのだけれど、任せてちょうだい。」

「お任せ下さい。」

「おう。じゃ、行ってくるわ。」

—————

買う物を買って、部屋に帰ろうとすると…

比企谷くんへ。

由比ヶ浜さんの依頼で、家庭科室に行く事になりました。

なので、貴方もそこに来てください。

…と、メールが来た。

家庭科室？何故だ？

そう言えば、昨日は鶴見先生の授業があったな。

申し訳ない事をしたな、今度遊びに行く時は菓子でも持っていこう。

そんな事を考えながら、家庭科室へ向かう。

「ふう、来たぞ。雪ノ下、姫野、由比ヶ浜、ほらやるよ。」

『我!?我のは!?』

嫌い、お前は飲めないだろ。

『鳳凰丸』を無視し、雪ノ下には野菜生活、姫野と由比ヶ浜はよく知らないから、ミルクティーを買っておいた。

「あら、ありがとう比企谷くん。」

「あつ、私このミルクティー大好きなんです。ありがとうございますね、八幡先輩！」

「あ、あの…ありがとう…」

「…どういたしまして。」

三者三様の反応を返してくれる彼女達。

まあ、喜んでくれたのなら何よりだ。

だが…

『ズルい！ズルい！我も早く人間になりたい！』

と、叫んでいる奴も居る。

お前は妖怪人間か！ドラマしか見た事ないけど！

「で、結局何するんだ？」

「クツキー…クツキーを焼くの。」

「はあ、クツキー…」

素直に何で？としか思わない。

確かにクツキー美味しいけどさ…

「由比ヶ浜さんは食べてほしい人が居るらしいのだけど、上手く作れる自信がないらしいの。」

「だから、結衣先輩は奉仕部に依頼しに来たらしいですよ。」

「へえ…」

成る程、そういう事か。

…不得意分野だな。

料理こそ出来るが、菓子は正直専門外だ。

七望兄さんなら、めっちゃくちゃ上手いんだが…

「よし、雪ノ下頼んだ。味見なら任せろ。」

「ええ、任せなさい。美味しいクツキーを彼女が作れる様にしてみせるわ。」

しかし、この時の俺達は知らなかった。

この後に待ち受けている惨劇：

：第一次ポイズン・クツキングを。

続く

## 第37話 第一次ポイズン・クッキング

### 第37話

それから、雪ノ下と由比ヶ浜によるクッキングが始まった。

論外な『鳳凰丸』を除けば、俺と姫野は味見係となった。

姫野も料理はできるらしいが、お菓子には手を出した事がないらしい。

でも、和食ならかなりイケるとの事。

これが大和撫子か…

「よし、やるぞぞお！」

「全く、ちゃんとエプロンは着れてないわよ。」

「あ、ごめん。ありがとう！」

うーん、大丈夫かこれ？

何か幸先悪いんだけど…

—————

結論から言おう…

…予想は的中しちゃいました。

「な、何で……………」

「理解できないわ…。どうやったら、あれだけのミスを重ねる事ができるのかしら……………」

「由佳と同じくらい酷い…」

「ここまで来ると、逆に才能かもな…」

『この女、毒物遣いなのか?』

それぞれの感想をぶつける…

…目の前にある、物体Xに向かつて。

殻が入った溶き卵、ダマになった小麦粉、当然の様に砂糖とすり換わる塩、過剰にいれたバニラエッセンスと牛乳。最早隠せてない程にいれたコーヒーの隠し味。

うん、失敗しない要素がない。

「で、でも、食べてみないと解らないよね!」

「…そ、そうね。では、比企谷くん、姫野さん。味見、頼んだわね。」

「…えっと、その、が、頑張ります。」

「はは、雪ノ下にしては珍しい間違いだな。これは味見じゃなくて、毒味と言うんだ。」

「どこが毒よっ!……………毒かなあ?」

張本人が自信無くしてんじゃねえよ…

むしろ、俺が聞きたいわ。

『我、この毒物から妖気を感じるのだが…』

えっ、マジ？

最早、錬金術の域だよコレ…

…だが、依頼は依頼だ。

このジョイフル本田で売ってるみたいな木炭モドキを食べなければ…

「ええい、ままよ！」

ジーツとしててもどうにもならない。

覚悟を決めて、物体Xを口に入れる。

「ぐっ、何だコレは…」

苦い！苦すぎる！

今まで食べてきた物の中で一番不味い！

これ、気絶できた方が幸せなまでであるぞ！

「はあはあ、く、食えたぜ…」

「は、八幡先輩！」

「大丈夫、比企谷くん！安心して！ちゃんと葬式には友達代表として出てあげるから！」

『主人！主人！死んじや嫌！』

「そ、そんな、私、そんなつもりじゃ…」

いや、勝手に盛り上がってる所悪いんだけど…  
「勝手に、殺すな…」

あの時、買ってきておいいたマツ缶のお陰で無事に復活できた。

流石、マツ缶！千葉のソウルドリンク！

糖尿病になるまで飲むのを止めない事を誓うまでである。

「さて、由比ヶ浜さんがどうすれば、より良くなるか考えましようか。」

「由比ヶ浜が二度と料理しない事。」

「結衣先輩が、由佳みたいに開き直って料理を諦める事。」

『一変死んで、生まれ変わる事。』

「全否定された!？」

「比企谷くん、姫野さん。それは最後の解決方法よ。」

「それで解決しちゃうんだ!？」

それぞれの辛辣な答えに、ガツクリと肩を落とす由比ヶ浜。

仕方ないだろ、お前。

言っちゃなんだが、論外中の論外だったぞ？

「やっぱり、あたし料理に向いてないのかなあ？才能ってゆーの？そういうの無いし…」

あつ、コイツ！  
よりによって、雪ノ下の前でそれを言うのか…  
続く

## 第38話 今度こそ、真剣に

## 第38話

「由比ヶ浜さん、それは違うわ。最低限の努力もしないで才能の有る無しを決める事ほど、愚かな事はないわ。」

「うっ……」

有無を言わせない程の迫力で、雪ノ下が由比ヶ浜にそう告げる。

その雰囲気を押され、顔には戸惑いと恐怖が浮かんでいる。

それを誤魔化す様に……

「で、でもさ、こういうの最近みんなやんないって言うし。……やっぱり、こういうの合っていないだよ、きつと。」

それは悪手だ、由比ヶ浜。

雪ノ下は、そういう事を言う人間に甘くない。

「その周囲に合わせようとするのやめてくれるかしら。酷く不愉快だわ。自分の不器用さ、無様さ、愚かしさの遠因を他人に求めるなんて恥ずかしくないの？」

彼女の声は嫌悪に満ちていた。

それでいて、真剣な眼差しで由比ヶ浜を見据えていた。

だから、俺は、俺達は何も言わない。

この答えは、由比ヶ浜自身が見つけるべき物なのだから。

「かつ…」

「か？」

「かつこいいい！」

成る程、それが彼女の答えか。

「は？」

と、思わず雪ノ下は口に出してしまふ。

姫野の奴も声にこそ出してはないが、信じられない物を見る目だ。

「建前とか全然言わないんだね。なんていうか、その…そういうのカッコいい！」

「えっ？その、話聞いてた？これでも結構キツイ事を言った自覚はあるのよ？」

「確かに言葉は酷かったし、ぶっちゃけ軽く引いたけどさ。…でも、本音って感じがするの。ヒッキーや姫野ちゃんと話してる時もそう…ちゃんと話してるの。あたし、人に合わせてばかりだったから、こういうの初めてでさ…」

おそらく、初めてだったのだろう。

建前でなく、本音をぶつけてくれる相手と出会うのは。

由比ヶ浜は真つ直ぐ、真剣な眼差しで雪ノ下を見詰める。

ああ、もう彼女は逃げないだろう。

「ごめん、次はちゃんとやる。」

その言葉に雪ノ下は固まってしまふ。

全く、相変わらずアドリブが苦手なんだな…

「正しいやり方、教えてやれよ。味見なら、俺と姫野が幾らでも付き合うからさ。」

「はい、お任せ下さい！」

『ねえ、我も！我も主人に頼まれたい！』

その言葉に雪ノ下は微笑む。

「ええ、任されたわ。由比ヶ浜さん、一度お手本を見せるから、その通りにやってみて。」

「う、うん！」

—————

その後は順調に進んだ。

勿論、由比ヶ浜が作ったクッキーは不味かった。

それでも、ちゃんとレシピを守って作った物だ。

最初に比べれば、天と地、魔王とスライムくらいに差がある。

唯…

「何か違う…」

「どう教えれば伝わるのかしら？」

「何がいけないんだろう？」

『我、暇。主人、構え。』

『鳳凰丸』は無視安定として、コイツらはどうやら解つてない様だな。

「由比ヶ浜、このクツキーは女子に渡す物か？それとも男子か？」

「えっ？そ、その…男子だけ…」

「そうか、ならこのままで良いんじゃない？」

「へ？な、何で!？」

と、驚く様な表情を見せる。

雪ノ下や姫野も黙っているが、同じ表情を見せている。

「いいか、由比ヶ浜。男つてのは基本的に、単純な生き物だ。一生懸命作つたアピールを見た瞬間、『俺の為に頑張ってくれたんだ…』って勘違いする悲しい生き物でもある。」

七望兄さんなんか耐性無さすぎて、義理チヨコのチロル貰つただけで熱出した事あるし…

「要するに、上手くなくなつていい。お前の気持ちさえ伝われば、不味かろうと喜ぶんだよ。」

「ヒツキーも？」

「ああ、勿論。」

…昔の俺なら喜んだだろうさ。

今の俺は…ちよつと解らんけどな。

続く

## 第39話 やはり、由比ヶ浜は料理ができない

### 第39話

俺の言葉に納得したのか、由比ヶ浜は満足そうに帰っていった。

彼女は『自分のやり方で頑張ってみる』と言っていた。

全く、あのクッキーを渡される男子とやらは幸せ者だろう。

不味い味だとしても、あんな純粋な想いを込められたクッキーなのだから。

—————

次の日、今日も俺達の奉仕部は閉店休業中だ。

因みに、姫野も奉仕部に入ってきた。

嬉しそうにドヤ顔する姫野と、悔しそうに震えながら承認する雪ノ下という面白い構

図ができていたが：

何で入る入らないで揉めてんだろうね、彼女達？

そんな時：

「やつはろー！」

気の抜ける様な頭の悪い挨拶と共に、何故か由比ヶ浜が入ってくる。

おいおい、何だ？

…また依頼か？しかも、やけに変な臭いもするんだが…

「…何か？」

盛大な溜め息をつき、雪ノ下は彼女を見る。

「…えつ、なに？もしかして、あんまり歓迎されてない？ひよつとして、雪ノ下さんってあたしの事…嫌い？」

「いえ、嫌いではないわ。…ちよつと苦手、かしら。」

「それ女子言葉で嫌いと同義語だからね!？」

俺は姫野と『鳳凰丸』と一緒に、雪ノ下と由比ヶ浜がゆるユリしてるのを眺める。

「結衣先輩、同義語だなんて言葉知ってたんですね。以外です。」

「俺も思ったが、口に出してやるな姫野。」

『我、百合の花が見える…』

全く助け船を出さない俺達を雪ノ下が睨むも、そこにすかさず由比ヶ浜が話しかけてくる。

「そうそう。あたし、最近料理にはまってるじゃない？」

「いや、初耳なのだけど…」

「で、こないだのお礼ってーの？クッキー作ってきたからどうかなーって。」

その言葉に、雪ノ下の血の気が引いていくのが解る。

…勿論、俺達も。

くそつ、変な臭いの正体はそれか！

「いやーやつてみると楽しいよね♪今度はお弁当とか作っちゃおうかなーとか。  
やめろ、テロ兵器を作る気か？」

そのクッキーあげたい男子とやらに作って、被害を最小限にしておけ。

「あつ、そうそう！お昼、一緒に食べようよゆきのん！ひめのんも一緒にどう？」

「えつ、それは…というか、ゆきのんは気持ち悪いからやめて。」

「ひめのん？私が、ひめのん？」

うわあ、カオス。

というか、姫野の奴にまで被弾してるし…

よし、我関せずを貫こうつと…

「ねえ、ゆきのんとひめのんはいつもどこで食べてるの？」

「部屋だけど…。ねえ、話聞いてたかしら？」

「えつと、最近は部屋ですかね…」

何故チラツとこつちを見る…

言っておくが怪異以外は専門外だぞ、俺？

「あ、それでさー！あたしも放課後とか暇だし、部活手伝うね♪いやーもーなに？お礼？これもお礼だから、全然気にしなくていいから♪」

「あはは……」

「……話、聞いてる？」

怒濤の一斉攻勢に姫野は兎も角、あの雪ノ下まで圧倒される。

凄いな、由比ヶ浜……

「ふっ……」

『主人、何処か行くの？』

「マツ缶を買いにな。それによく言うだろ？」

百合の間に入る行為ほど、愚かしい行為はないってガイア様がな。

こうして、俺は部室を出ていく。

比企谷八幡は、クールに去るぜ！

「待ちなさい、逃げ谷くん！」

「待ってください、八幡先輩！」

『女どもが呼んでるぞ、主人？』

……比企谷八幡は、クールに去るぜ。

続く

## 幕間④

### 幕間 その7 お礼と願い

その7

「ま、待って、ヒツキー！」

マツ缶が売ってある自動販売機に辿り着くと同時に、後ろから由比ヶ浜が呼び止めてくる。

何だ？ゆる百合タイムは終了したのか？

「あの、えっと、これ……どうぞ！」

と、歪んだハートの形をした禍々しいクツキーを渡してくる。

くっ、やはり俺のもあったか……

「昨日のお礼！ヒツキーも手伝ってくれたし！」

「味見しただけだが……礼というならありがたくもらっておくよ。」

そう言われると、受けとるしかなくなる。

全く、これだから女子は卑怯だ。

しかし、その後も由比ヶ浜はモジモジしている。

何だ？お花摘みにでも行きたいのか？

「それと…あの時のお礼！」

「はっ？あの時？」

あの時？

一体、何がなんだか…

しかも、物凄く泣きそうな顔で言うのやめてくれる？

変な罪悪感が湧いてくるから…

「去年の入学式の時、私のペット…サブレを助けてくれた事のお礼…です……」

「去年？ペット？ああ、あれか！」

すっかり忘れてた！

ぶっちゃけ、雪ノ下と会った事しか覚えてなかったし、合法的に休める休暇としか

思ってたなかったんだよなあ…

骨が折れる程度なら、怪異の呪いや霊症と比べれば些細な事だし…

「そうか、お前のあの時の飼い主だったんだな。でも、雰囲気変わってないか？」

あの時の飼い主はチラツと見たが、黒髪だった気がするんだが…

「あの時は…その…染めてなかったし………」

「へえ。あの時の犬は大丈夫だったか？」

「う、うん。ヒツキーのお陰で……」

それは良かった。

だが……

「なあ、由比ヶ浜。」

「は、はい！」

「もう気にするな。笑え、その方がお前に似合ってるぞ。」

「えっ……」

と、俺は由比ヶ浜を落ち着かせる為に、今にも泣きそうになっている頭を撫でる。

その姿がどうしようもなく、小町達と被ってしまった……

全く、バカだなあ俺……

「そ、そうかな？」

「ああ。さつき部室で晒してたアホみたいな笑顔とか、お前にぴったりだったぜ？」

「なっ！ヒツキーのバカあ！」

「ちよっ、まっ！」

痛い、地味に痛いから胸を叩くのやめてくれ！

うん、でもその方がやっぱ良いわ。

「もう、先に部室戻るね！」

「ああ。戻る時、転けない様に気を付けろよ。」

「ヒツキー！」

うん、コイツをからかうの楽しいな。

「……………ありがとう。」

「…どうたしまして。」

でも、礼を言うのは俺の方だ。

由比ヶ浜、どうかこのまま雪ノ下達と仲良くしてやってくれ。

いつか居なくなるかもしれない俺よりも、理不尽側に片足を突っ込んでしまっただけ戻れない俺よりも…

眩しくて、輝かしいお前みたいな何も知らない奴がきつと…

…彼女達には必要だから。

続く

## 第1部 最終章 怪異症候群

### 第40話 神代家の謎

#### 第40話

「でさ…それが後の『ヒサルキ』っていう都市伝説になった訳さ…」

「へえ、そうだったんですね…」

「おい、剛！こつちで本当に合ってるのか？」

「もう少し静かにしてくれ…」

「七望兄さん居なくて本当に良かった…」

今、俺達は車に乗って、とある場所へと向かっていた。

平日、学校が普通にある真昼からだ。

「ああ、大丈夫だせ！」

「七望さんはどうしてるんですか？」

「ん？先に行って待つてるってさ。」

あの野郎、めちやくちや美味しそうな料理の写真付きでメール送ってきてきやがった。

「ああ、そーいや等。お前、確かあの時は大変な目にあつてたよな、あの『河童事件』！」

「……………」

「……………あれか、あれは酷い事件だった。」

何があつたって？

はは、思い出たくもねえ…

「はあ、早く着かないかなあ…」

「…そうだな。早く終わらせて、平日の旅を楽しもうぜ。」

何故、こうなつたかというと…

—————

二週間、何も起こらなかった。

連続で姫野を襲い続けていた怪異達は鳴りを潜め、影すら見せなかった。

奉仕部としても、材木座という厨二病患者からの依頼を除けば、暇だった。

だが、これは嵐の前の静けさだと確信していた。

おそらく、姫野の奴も…

「さて……『猿夢』の件から何も進展がない訳だが、例の調べ物について何か手掛かりは

掴めたか？」

「おうーちゃんと資料にまとめてきたぜ！」

「（こちらも問題はない。」

「で、あのアホ兄貴は？」

俺が『猿夢』と戦っている時から調べ始めた手掛かりの報告会なのに、何でアイツ居ないんだよ…

「七望なら行かなきゃいけない場所があると言つて、後で合流する気らしい。」

「マジか、何してんだアイツ…」

まあ、アイツの事だ。

ちゃんとした理由があるんだろうが、一体どこに行つてるんだよ…

「聞いて驚け！どうやら、神代家の祖先は渡来系の『巫医』…つまり『呪術師』<sup>シャーマン</sup>の家系として、数百年もの歴史を持つてたらしいんだ。」

「何だつて!？」

「神代家がかつて、幾つかの秘法を家の技として子孫に伝えていたそうだ…ある年代まではな。」

つまり、今はもう…

「だが、400年前を境にそれがパタツと途絶えちまつたらしい。その歴史を、現当主であつた『神代 由佳の親父』でさえも知らなかつた可能性が高い。」

「…自分の家の歴史も知らなかつたのか？」

案外知らない物ではないのだろうか？

まあ、七望兄さん辺りなら嬉々として調べていそうだが…

「で、そんな情報をどうやって調べる事が出来たんだ、剛?」

「実はな…『旧・神代家』ってのが在ってな。そこに住んでる『神代 由佳』の祖母、『神代 伊代』って婆ちゃんに突き当たったんだよ。」

「成る程、それで神代家のルーツを…」

「まあな。と言つても、その婆ちゃんも自分の祖父から聞いた与太話みたいな感じだった様だけどな。」

つまり、神代 由佳は…

「…神代家には『呪術師』としての力があり、その末裔である神代 由佳が『ひとりかくれんぼ』を施してしまった。そして、それが大きな怪異を呼び寄せる原因になってしまった、か…」

続く

## 第41話 怪異症候群

### 第41話

神代家についてはよく解った。

だが、肝心なのは姫野の方だ。

「翔太、お前の方はどうだ？比企谷兄弟に守られていたとはいえ、大きな怪異に対しては  
ぼ何事もなく掻い潜る事が出来たのか解ったか？」

おそらく、アイツは関係ないだろう。

そうでなきや、俺に守らせようとはしないだろうから。

「どうやら、姫野家の方も『呪術師』の家系らしい。」

「何だと!?!」

成る程、スタンド使いがスタンド使いと惹かれ合う様に、彼女達も惹かれ合ったとい  
う事か？

それに、彼女には『鳳凰丸』が見えていた。

等さん達や、雪ノ下にさえ見えなかったのに…

「数百年前、筑紫地方に姫野と呼ばれる一族がいた。その一族は有能な呪術師として、古

来より伝わる家の秘法を受け継いでいたそうさ。」

筑紫地方…九州か！

めちやくちや遠い所に居たんだな、姫野のご先祖様とやらは。

「だが、『呪術師』と言つても一括りにできん。彼らは主に祈祷や疫病封じが専門だったそうさ。」

成る程、呪術師は呪術師でも、姫野は護る・封印特化だった訳か…

「しかし、400年前から突如として…その歴史は闇に葬られる。神代家が辿った歴史と同じ様にな。」

つまり、神代と姫野との間には何かがあつた可能性が高いという事か…

壮大な話になってきたな…

「等さん、この事は姫野に言うんですか？」

「…そのつもりだ。」

「…解りました。俺から言っておきます。」

いや、大丈夫か。

どうやら、その必要はないみたいだ…

「いえ、大丈夫です。全部、聞きました。私の事も、由佳の事も…」

「…で、どうする姫野？過去の因縁からは逃げられないぜ、経験則だ。」

その問いに、姫野は真剣な眼差しを向ける。

「私はもう逃げません！八幡さん達に守られているだけじゃない。自分自身で、向き合いたいです！例え、自分の家の過去に何があろうと！」

覚悟は決まってる、か。

なら、これ以上は何も言わない。

「そうか、なら俺は全力で姫野を援護するでしょう。お前自身が魚を取れる様にな。」

「八幡さん…はい！」

今は部活中じゃないが、雪ノ下…お前のやり方を貸して貰うぜ。

「おいおい、八幡だけじゃない。俺たち達も忘れるなよ、美琴ちゃん！」

「はい！どうかお願いします！」

そして、姫野は西の方を向きながら…

「感じるんです…。ずっと向こう…西の方角から変な力を。」

「旧・神代家か…」

「多分…そうです。もう、終わりにしなきゃいけない。もう断ち切らなきゃいけない。その為にも…改めて、私に力を貸してください！」

これで目的地は決まった。

さあ、こんな呪いの連鎖は終わらせよう。

「…車は俺が出す。案内は任せたぞ、剛。」

「おう！任しとけ！」

「やれやれ、気合いを入れないとな…」

「皆さん…」

おいおい、今泣きそうになるなよ…

「まだ終わってないぞ、姫野。」

「解つてます…でも、嬉しくて…」

「ふっ、さっさと決着を着けようぜ、この『怪異症候群』に。」

「…はい、八幡さん！」

続く

## 第42話 旧・神代家

### 第42話

「ゆきのん！一緒に食べよう！って、あれ？ヒッキーが休みなのは知ってるけど、ひめのんは？」

「彼女も休みよ、由比ヶ浜さん…」

全く、羨ましいわ。

怪異絡みだから仕方がないとはいえ、比企谷くんと一緒にお泊まりだなんて…

「はあ…」

「どしたの、ゆきのん？」

「いえ、大丈夫。少し不安なだけよ…」

でも、これで条件は五分五分。

負けるつもりは更々無いわよ、姫野さん…

—————

「ふう、着いたな。しかし…」

「わあ、大きい…」

「これが旧・神代家か…」

「やつぱり、凄い大旅館だよな！」

「ふむ、色々と面白い物が眠ってそうだな。」

『やつと止まった！我、車、嫌い！』

各々が目の前の旅館について感想を漏らす…

ていうか、『鳳凰丸』。お前、車苦手なのか…

「ようこそ…わざわざ遠くからご苦労様です。」

「いえ、こちらこそご協力感謝します。」

「いえいえ。…ですが、色々と警察の方には目を瞑って頂かねばならぬ事も多少ありま

すゆえ、そこは宜しくお願いします。」

「…承知しています。そもそも、私の手の及ばない話ですから。」

ああ、成る程。

良い場所だと思つたが、そういう事にも使われてるのか…

「八幡さん、何の話をしてるんでしょうか？」

「知らなくて良いぞ、姫野。まあ、しいて言うとするのなら、暇と金を持って余したジジイ

どもの遊技場って事だ。」

『色々な欲望の気配が渦巻いてて、混沌としてるぞ主人！』

それは言われなくても解ってる…

…まあ、気にしてもしょうがない事だ。

—————

その後、神代のお婆さんに案内され、旅館内を回った。

広いのに綺麗で、和の雰囲気です押し潰されそうになる位に荘厳さを保っている。

今まで泊まってきた宿泊施設の中で一番なまであるぞ、これ…

「凄いですね、八幡さん…」

「…ああ。正直、想像以上だ…」

「おっ？八幡に姫野くん、等さん達じゃん！来るの遅かったね！」

と、先に来ていた七望兄さんが前からアホ面下げてやつてくる。

全く、俺達が遅いんじゃないやなくて、お前が早すぎるんだよ…

「ん？八幡、何だその刀…」

「ああ、やつぱりお前にも見えるか…」

「何だ？訳ありか？」

『主人、何コイツ？主人と似たような気配がして気色悪いぞ！』

まあ、再従兄弟だし…

昔からよく似てるって言われてたし…

「うおっ！喋るのか…」

「『鳳凰丸』、コイツは比企谷 七望。俺の再従兄弟だ。親しみを込めて、バカ兄貴と呼んでやれ。」

『うん！宜しくね、バカ兄貴！』

「くそっ、悪気がない分、かなり心に響く！」

まあ、そんな茶番もありつつ、俺達は最後に中庭を案内して貰った。

別館もあるが、それは本館を調べ終わってから行くらしい。

だが、その中庭で…

「えっ、何で!？」

「ん、姫野? どうし………は!？」

「おいおい、どうした八ま…嘘だろ? どうして、今まで気がつかなかったんだ!」

続く

## 第43話 神代 春子

### 第43話

「あつ、お姉ちゃん!? どうしてここに? それに、後ろのお兄さん達は?」  
会いたくなかった。

出来れば、決着を着ける前に再会などしたくなかった。

何で、お前がここに…

「おい、八幡…」

「…解つてる。」

「そうか、なら…」

「待て! 姫野の前だ…」

「ああ? そんな悠長な事を…」

俺達が言い争っている中、二人は気にせず会話を続ける。

「あの人達は私の友達なの。私達はちよつと調べ物があつてここに来たんだよ。ハルちゃんはどうしてここに?」

「…私、ここに預けられる事になったの。」

「そう……なんだね……」

「うん。でも、ここ気に入ってるんだ！お姉ちゃんもたまには遊びに来てね♪」

「……うん、約束だね。」

指と指を絡ませる姿が、より心に響く。

ああ、本当に気持ちが悪い……

「くっ、お前が殺らないのなら、俺が代わりに殺るからな！」

「待てといってるだろ、クソ兄貴！」

「何故待つ必要があるんだ、クソガキが！アイツは俺達の……」

「ねえ、お兄ちゃん達！」

姫野と話していた筈のアイツが、俺達に近づいてくる。

はあ？何で今、こっちに來るんだよ!?

死にたいのか、コイツ!?

「ああ？」

「何で喧嘩してるかは知らないけど、そんな顔しちゃうよ？ほら、笑顔

♪

「……ズルいだろ、それは。」

「ああ、全くだ……」

どうしようもなく、毒気を抜かれてしまう。

…多分、七望は俺と同じ物を見ている筈だ。

この子の向こう側に、死なせてしまった俺達の妹の姿を…

「七望兄さん…」

「…何だ、八幡？」

「俺、『ひとりかくれんぼ』の時にもアイツに会った事がある。最初は殺そうとした。でも、『お兄ちゃん』という言葉を聞いてしまった。」

あの言葉さえ無ければ、俺は、俺は……

「もう良い、俺もあれは無理だ。どうしようもなく、心にブレーキがかかっちゃう。」

「…ああ。もう俺達は、最初の予定通りにやるしか選択肢は無くなった。」

それまでは、見守り続けるしかないだろう。

目の前に居る、この娘を…

「ねえ、お兄さん達の名前は何ていうの？」

「…俺は比企谷 八幡だ。」

「…俺は比企谷 七望だね。」

「八幡お兄さんに、七望お兄さんだね♪私の名前は神代 春子！宜しくね♪」

俺達はその言葉に顔を見合せ、思わず笑みを溢してしまう。

ああ、懐かしい。

でも、もう二度と戻らない日常。

理不尽によつて奪われ、凌辱された過去を思い出しながら…

「ああ、宜しく頼むぜハルちゃん。」

「あつ、ナデナデ♪ナデナデするの上手だね、お兄さん達！私のお兄ちゃんより上手かも

♪」

「そうか、それは良かった。」

「よし、褒めてくれたご褒美にもっとしてあげようか！」

「わーい、やったあ♪」

続く

## 第44話 能面

### 第44話

その後、めちやくちやハルちゃんの遊びに付き合わされた。

最近の小学生って、あんなにパワフルなのか…

滅多に疲れる事のない俺達が、ここまで消耗させられるとは…

小学生、恐るべし…

「お兄さん達、また遊ぼうね♪」

「お、おう。またな…」

「ば、ばいばい…」

「お二人とも、お疲れ様です…」

疲れ果てた俺達に、姫野が水を持ってきてくれる。

気が利くなあ、良いお嫁さんになりそうだ…

「そんなあ…照れるじゃないですか…」

「ん?どうした、姫野?」

「女の子って、時々勝手に照れたりする事あるけど、一体なんなんだろうね?」

「さあ、解らん？」

ナチュラルに心を読んでる訳じゃあるとか？

はは、そんな事はないだろうな…

…ないよね？

「ああ、美琴ちゃん！ここに居たのね。」

「あつ、由佳のお婆さん…」

何の用だろう？

「お夕飯ができるまで、時間あるから、別館の方も寄つてみたらと思つて…」

「あ、ありがとうございます！」

別館か…

後で調べる予定だったが、ブラブラする位なら別に良いか…

「どうする、行くか姫野？」

「うーん、私は少し行つてみたいです。」

「俺はパス。疲れた…」

だらしのないなあ、全く…

いや、俺もかなり疲れたけどさ。

「じゃあ、行つてみるか。」

「そうですね、行ってみましょうか！」

別館には色々な部屋があつた。

「あつ、これ木魚かな？初めて見たあ……」

「へえ、よく出来てるな……」

昔ながらの楽器が置いてある部屋。

「わあ、着物がいっぱい！」

「凄い量だな、最早そういう店の域だ。」

「あつ、化粧もある！でも、肌が荒れるから、嫌なんですよね。」

「だから、姫野からはキツイ化粧の臭いがしないのか。シャンプーとかの良い匂いはするのにな、不思議に思ってたんだよ。」

「えつ、私良い匂いですか？」

「お、おう。」

「えへへ、嬉しい……」

そんな感じの事があつた化粧部屋や……

「さっきの着物以上に本があるな。俺のクソ親父の実家みたいだ……」

「そんなに在るんですか？」

「ああ。基本的に、俺の家族は本が好きだったからな。」  
「へえ、そうなんですね。」

資料が沢山置いてある部屋も在った。

…後で、翔太さん達を案内しないとな。

「わあ、大きい…」

「凄い仏像だな…」

「ここで宴会とかやるのかな？」

「ここだけ広いし、そうかもな。かなりドンチャン騒ぎできそうだし…」

まあ、少し仏像の圧が強すぎる気がするが…

「言っちゃ悪いが、悪趣味だな…」

「はは、ですね…」

最後に訪れた部屋は、部屋一面に能面が飾られていた。

翁や狐、般若、若女など様々な種類がある。

うーん、普通に不気味だ。

まあ、ラリックマヤ『くねくね』、『猿夢』と比べたらマシなのだが…

『み、み、見つけた、見つけたゾ！』

続く

## 第45話 動き出す局面

### 第45話

『危ない、主人!』

「きゃっ! 『鳳凰丸』ちゃん!」

「なっ、いつの間に!」

変な声が聞こえたと思つて瞬間、若女の能面が動き出す。

『鳳凰丸』のお陰で助かったが、何で気配を感じなかつたんだ!?

あの『猿夢』より強力な気配を出してるのに…

『主人、あの小娘が居なくなつたお陰で我、気分が頗る良いぞ! 主人も助けられたし、褒めて!褒めて!』

ちっ、そういう事か!

アイツのせいで、色々と感覚を狂わせられてたのか!

くそっ、どこまでも俺を苛立たせる奴め…

『じゃ、じゃ、邪魔を、す、す、するナ!』

「はっ、やだね! 姫野、先に本館へ戻つてろ!」

「はっ、はい！」

まずは、姫野を逃がす。

本館にはクソ兄貴が居るし、まあ大丈夫だろう。

「じゃあ、殺ろうか。行くぞ、『鳳凰丸』！」

『了解だ、主人！さっさと奴を斬り刻もうぞ！』

「はあはあ…」

「おっ、姫野くんも来たな。あれ、八幡は？」

私の本館へ戻ると、用意された夕飯を前に皆で食卓を囲んでいた。

七望さんに至っては、ハルちゃんに揉みくちやされてるし…

でも、嬉しそう。そっちの気があるのかしら？

…って、違う！そうじゃなくて…

「ん、どうした美琴くん？」

「はあはあ、襲ってきたんです！能面が、一人で動いて！」

「何だって!？」

と、食卓が驚きに包まれる。

七望さんは慌てながら…

「えっ、怪異の気配は……ああ、そういう事か。アイツが居たのに襲われる訳だ。」

と、ハルちゃんを見ながら納得していた。

一体、ハルちゃんに何が…

「ふむ、早くも彼女の影響が開始めたか…」

やつぱり、そうなんですな…

「今、八幡さんが一人で…」

「成る程、なら大丈夫か。剛さん、手筈通りに行きますよ。」

「おう！こういう事態が起きた時は、俺たちが旅館の人達を避難させるんだろ？解つてるさー！」

「よし、俺達もやれる事をするぞー！」

八幡さん、こっちは大丈夫です。

だから、無事で…

「はあはあ、面倒だな。」

『あんまり斬り心地が良くない…』

『ひ、ひ、ひめノ！ひめノひめノひめノオ！』

コイツ、遠隔から操られてるだけだな。

斬つても、殴つても、蹴つても、元の形に戻りやがる。

『ら、ら、埒が、あ、あ、開かない。つ、つ、次は、し、し、仕留めル!』  
「待て!」

ちっ、逃げられた。

「ふう、本館に戻るか…」

どんどん、この旅館から発せられる怪異の気配が強くなつてきてやがる。

しかも、下…

…下の方から特に力を感じる。

「つたく、アイツ程じゃないとはいえ、強力そうだな…」

前の怪異達以上に苦勞しそうだ…

続く

## 第46話 お手柄、鳳凰丸

### 第46話

急いで本館へと戻る。

すると、姫野達は本館と別館を繋ぐ渡り廊下で待つていて…

「ふう、大丈夫か姫野？」

「八幡さん！そっちこそ、大丈夫でしたか？怪我とかありません？」

「大丈夫だ。だが、あの能面の奴は逃がしちまった。」

今度会ったら、確実に殺してやる…

「八幡、どんな怪異だったか説明してくれ。」

「はい、等さん。奴は…」

等さん達にどんな奴だったかを話す。

その時、ふと思ひ出す。

確か…

「翔太さん、奴と戦ってる最中に見つけた物なんだが…」

奴と戦ってる時に、荒らしてしまった部屋のの中から出てきた古い本。

こちらに戻る前に読んで見たが、古すぎてよく解らなかつた。  
だが、翔太さんなら…

「それは!? ふつ、お手柄だな八幡。早く資料がいつぱいあつたという部屋に案内してくれ。そうすれば、『神代』や『姫野』の謎について解明できそうだ!」

珍しく楽しそうな、翔太さん…

やつぱり、この人そういうの好きなんだなあ…

「七望兄さん、用心棒兼助手頼むぞ。」

「ああ、そつちも頑張れよ!」

資料室に翔太さんと七望にを残し、俺達は本館へと戻る。

奴に逃げられた時からずつと感じている力を調べる為に…

「ちようどこの下辺りから感じるんだが…」

中庭、ちようどその真下から変な力を感じる。

だが…

「地下室でもあるのか? だが、伊代さんからはそんな話は聞いていないな…」

「さ、探してみましよう!」

しかし、手掛かりは皆無に等しい。

全く、それらしき物は見つからない。

どうするかと頭を抱えていると…

『主人、あそこ…』

「ん？どうした、『鳳凰丸』？」

身体が無いから、どこを指してるかよく解らんのだが…

『怪しいから、我、斬るね♪』

「は？なつ、ちよつ…」

制止する前に、奴は勝手に飛び出す。

そして、綺麗な石灯籠を粉々に粉碎し…

「きやつ！急に灯籠がって、何やってるの『鳳凰丸』ちゃん!？」

『鳳凰丸』？八幡の見えない刀が何かやったのか？」

「すみません、等さん！『鳳凰丸』、お前何やって…」

しかし、俺は固まってしまった。

『鳳凰丸』が壊した石灯籠の下に、隠し扉みたいな物があり…

『ほら、やつぱり！凄いでしょ？褒めて！褒めてよ、主人!』

「…ああ、助かった。お前は最高の刀だ、『鳳凰丸』…」

色々と言いたい事はあるが、お手柄だ！

「等さん、姫野！『鳳凰丸』が隠し扉を見つけてくれた！直ぐに開けてみる！」  
くつ、かなり重い扉だな。

だが、これしきの事で…

「さつさと…さつさと開きやがれ！」

重い扉を無理やり抉じ開ける。

はあはあ、マンホールより重かったんじゃねえか、あの扉…

「さて、何が待ってるのやら…」

続く

## 第47話 明かされる秘密

### 第47話

隠し扉の先へと入っていく。

中は薄暗く、あまり良い場所とは言えない。

「…暗いな大丈夫か、八幡?」

「これ位なら大丈夫ですよ、等さん。姫野、危ないから手伝うぞ。」

「あつ、ありがとうございます!」

後から続いて降りてくる姫野の手を取り、ゆっくりと降ろしてやる。

等さんは兎も角、こんな所で怪我されちゃ敵わんしな。

「…こつちか。」

力を感じる方へ進んでいく。

近付けば近付く程、その力は増していく。

だが…

「あの能面とは違う…」

近付いたお陰で解ったが、明らかにあの能面とは違う力、気配だ。

むしろ…

「八幡さん、氷室さん…」

「…美琴くん？」

「…どうした、姫野？」

「私、感じるんです。この奥に…何か大切な物が有るつて…」

…むしろ、この感覚は姫野から感じる物に近い。

おそらく、この先にある物こそが、『姫野』の根元に関わる…

「…行きましよう。この先に、私が向き合わなきゃいけない物がある。」

「了解、元よりそのつもりだ。」

「ああ、俺達の任務は君のフォローだからな。」

姫野と一緒に奥へと進んでいく。

その奥には、立派な社が建ててあった。

これか…

この中に力の正体が…

「あれ？この社、開かない…」

「鍵がかかっているのか？それとも…」

いや、鍵じゃない。

結界、かなり強い結界が張られている。  
なら…

「等さん、姫野、少し退いてくれ…」

「え？」

少し離れた所で、『鳳凰丸』を構える。

開かないのなら、決じ開ければ良いだけだ。

「行くぞ、『鳳凰丸』！」

『了解だよ、主人！斬りがいのある結界だあ、ワクワクするね♪』

一振り、一閃。

放たれた斬撃が、社の結界とぶつかる。

そして、思ったよりも簡単に結界は斬り裂かれる。

疑問に思うが、すぐ切り替える。

「開きましたよ、等さん。」

「決じ開けたの間違いだろ…」

「…開きましたよ、等さん。」

「あはは…」

まあ、開いたから結果オーライですよ。

『結果は過程を正当化する』って、あのニチアサでも言ってるんですから…  
「さて、中身は…」

中を除くと、本らしき物があった。

それを手に取ると、違和感を感じる。

これ、『猿夢』の時と同じタイプの…

「ほら、姫野。多分、お前が持つべき物だ。」

「あ、ありがとうございます。」

手渡した瞬間、姫野が出す気配が変わった気がする。

より力強く、より優しい物に…

「八幡さん…」

「どうやら、正解らしい。だが…」

空気が読めない奴が近づいてきている。

色々とその本を調べる前に、奴には退場して貰わないとな。

『み、み、見つけたゾ!』

「コイツが例の能面か、八幡?」

「ええ。姫野、お前は下がってる…」

「は、はい!宜しくお願ひします!」

俺は『鳳凰丸』を、等さんは霊光銃を構える。

『じゃ、じゃ、邪魔をするナ!』

「邪魔なのはお前だ、能面!」

斬撃や銃撃を何度も放ち、奴はその度に破壊と再生を繰り返していく。

だが、俺達は容赦なく攻撃を続ける。

コイツはラリックマとは違う。単純に再生能力が高いだけの怪異だ。

なら、根性比ベをしてやれば良い。

こちらが果てるか、お前が果てるか。

さて、どっちが勝つかな?

『ふ、ふ、ふざけるナア…』

「ちっ、もう限界か。まだ百発もぶち込んでないというのに。」

「だが、奴は倒せた。早く翔太の所へ戻ろう。」

全く、また復活したら今度からヤプールって呼んでやるよ、能面め。

「わあ、凄い。八幡さんだけじゃなくて、氷室さんもって!」

『す、す、隙を見せタ……………エ?』

全く、ヤプールめ。そうそうフラグを回収してくるんじゃないやねえよ。

「もしかして、刺されるのが好みか?」

能面には俺の『鳳凰丸』と、等さんのナイフが突き刺さり、崩壊をし始めている。

『ああ、ああ、わ、わ、わ、我らが悲願…』

「さっさと死んどけ、もう面倒だ。」

崩れ落ちていく能面を完全に蹴り碎く。

もう二度と復活しないという保証はないが、当分は大丈夫だろう。

続く